2024年度ティーチングポートフォリオ（社会福祉学部）

＜目　次＞

１．疇　地　希　美　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p　１
２．石　川　　洋　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p　３
３．石　牧　良　浩　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p　６
４．伊　藤　明　代　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p　９
５．井　上　　薫　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p１３
６．岩瀬真寿美　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p１７
７．牛　田　　篤　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p１９
８．太　田　和　佐　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p２３
９．大　橋　徹　也　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p２６
１０．小沢日美子　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p２９
１１．勝　野　愛　子　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p３１
１２．加　藤　昭　宏　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p３４
１３．神　谷　良　恵　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p３６
１４．鴨澤あかね　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p４１
１５．川　乗　賢　也　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p４４
１６．北　島　信　子　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p４７
１７．工　藤　隆　治　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p４９
１８．汲田千賀子　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p５２
１９．下　山　久　之　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p５４
２０．都　築　治　彦　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p５５
２１．福　島　裕　人　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p５８
２２．藤　林　清　仁　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p６１
２３．宮地菜穂子　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p６４
２４．村　上　逸　人　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p６７
２５．山　口　章　夫　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p７０
２６．吉田みゆき　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p７５
２７．羅　　佳　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p７７
２８．渡　邊　幸　良　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p８０

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　講師　疇地　希美

１、教育の理念

同朋大学社会福祉学部子ども学専攻では子どもの専門家の育成を目指した教育を実践している。ディプロマポリシーでは、乳児・幼児に関連する分野において社会貢献可能な人材の養成を目的とし、子どもの専門家としての知識、能力、基本的態度を身に付けられるような教育の実践を掲げている。疇地の担当科目は主に音楽分野に関するもの、幼児教育実習に関するものであるため、音楽表現の実践と理論を結びつけて学修することを重視している。理論と実践の往還により、将来学生が保育者として働くために必要な知識、能力、基本的態度の向上を目指した教育を行なっている。学生に対しては、子どもの発達における音楽の重要性はじめ、子どもと音楽の様々な関わりを知識として学ぶだけではなく、保育の実践者として子どもとともに音楽を楽しむ活動を導くための表現能力の獲得し、生涯にわたり自身で学び続けることができるように、主体的な学びに取り組んでいくことのできるような教育の実践を心掛けている。

２、担当授業の概要

音楽ⅠA、音楽ⅠB、音楽Ⅰ、音楽ⅠJ
音楽ⅡA、音楽ⅡL
幼児と音楽表現A、幼児と音楽表現B
保育内容「音楽表現」の指導法A、保育内容「音楽表現」の指導法B
子ども学演習ⅡA
総合演習ⅠG、総合演習ⅡG
幼児教育実習指導1
幼児教育実習指導2
幼児教育実習Ⅰ
幼児教育実習Ⅱ

３、教育の方法

「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」の授業では、幼児と音楽の関わりや楽典などの音楽の理論を理解するだけでなく、学生自身の音楽表現技術であるピアノ演奏、歌唱、弾き歌いなどの実技の向上を目指した講義を実施している。大学入学以降にピアノを始める学生が多いため、初学者に対応するためのサブテキストを作成し、使用している。楽譜の読み方の再確認、自分一人で毎日実践のしやすい練習方法、自分の出している音を注意深く聴きながらコントロールできるように練習する方法等を学生に寄り添いともに考えることを主軸に実践している。特に楽典では学生が理解しやすい教授方法だけでなく、学生とともに「子ども（幼児）に伝わる音楽表現にするにはどうしたら良いか？」を考えるような課題設定を心がけた。また、ピアノ初心者は人前で演奏をすることに慣れていないことから音楽表現が苦痛

になってしまわないように、連弾課題を用いるなど学生自身も音楽を楽しむことができるような課題設定を行なった。

「幼児と音楽表現」「保育内容「音楽表現」の指導法 A・B」では、グループワークで行うアクティブラーニング課題の発表を授業内で行うことを取り入れ実施した。アクティブラーニングにより、学生の主体的・対話的で深い学びを実現するため、中間発表と本発表においてその振り返りは意見交換を行う形で行った。また、授業の課題を行う上で「子どもの姿」を常に念頭におくように声かけをし、幼児教育実習や保育実習とこれらの科目のつながりを学生が意識できるように心がけた。音楽制作や表現活動に ICT を用いることで、体験を通してその長所短所を考えた上で保育に活用すべきかを学生に問いかけた。

「子どもの姿」を常に考えること、大学での勉強を実習へと結びつけることの 2 点は、「子ども学演習Ⅱ」や「総合演習Ⅰ～Ⅳ」などのゼミでも常に心掛けていた。現場の子どもの姿を意識することで、学生たちの自主的な学びにつなげることができた。4 年ゼミ生は全員がゼミ論を通し、一つの研究テーマについて論文を書き上げ、そのことについて語る事ができるようになった。また、ゼミ論文集として 1 冊にまとめることで学生の達成感を得ることができた。「音楽Ⅱ」では一つの課題曲に長期間にわたり取り組む課題も行なっている。課題曲を分析し、演奏における音楽表現方法や練習計画をペアを組む学生とともに作り上げていく過程を大切にしている。

４、学生からの評価と授業改善への努力

今年度の学生対象の授業アンケートは「幼児と音楽表現」「保育内容『音楽表現』の指導法 A・B」において実施された。学生からの評価に特筆すべき点はなかった。防音設備の整った音楽室ではなく、通常の講義室で授業を行なっている状態が続いているが、授業時間に同じフロアで他の授業を行わない等の対策で凌いでいる。今年度から電子ピアノ練習室の開放時間を増やし、学生が練習しやすい環境を保つように努めている。

５、今後の教育目標

同朋大学には音楽室がないため、まずは環境の整備を引き続き行なっていきたい。楽器の種類や数は充足しているため、これらを最大限に活用できるように調音機能のあるカーテンの設置等、教室の環境整備を行いたい。また、音楽鑑賞ができるような音響設備もないため学生が授業内課題で創作した音楽作品の録音や録画を披露した時に、制作時の印象と随分違うものになってしまうということも起きている。音楽鑑賞に耐え得る音響・映像設備の設置が必要である。

現在は同朋大学の設備に合わせてシラバスを作成しており、設備が無いために授業で取り扱うことを見合わせている教育内容もある。一般的な保育者養成課程を備えた大学・短大・専門学校と同等の内容の授業を行うことができるような学修環境の獲得を目標に今後も行動していく。

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　石川　洋

１．教育の理念

本学の社会福祉学部社会福祉専攻では，建学の理念である「同朋和敬」の精神に立脚し，広い知識と専門の学術を身につけ，社会福祉・教育・心理・経済行政など，地域社会に貢献可能な人間を養成することを目的としている．その実現のために，自ら課題を見つけようとする姿勢や考え方，またそれらの課題を解決する方法や判断について体系的・総合的に学修が進められるようカリキュラムが組まれている．私の場合は，主として数理・データサイエンス・AI や ICT 教育を通して，社会福祉・教育・心理・経済行政などに見られる諸課題を解決・判断できるような人材育成を目的として教育を行っている．

２．担当授業の概要

情報系の科目を主担当としている．着任 2 年目となり，新たに 3 年生のゼミを担当することとなった．

前期

社会福祉外書講読

社会福祉基礎演習ⅠB

情報社会 A

社会福祉演習 IQ（3 年生ゼミ）

情報処理演習

後期

情報処理 A

情報処理 B

社会福祉基礎演習ⅡB

情報社会 B

社会福祉演習ⅡQ（3 年生ゼミ）

情報通信技術を活用した教育に関する理論及び方法（教職科目

３．教育の方法

社会福祉基礎演習Ⅰ・Ⅱは 1 年生の演習科目である．前期は大学の環境に慣れる，友人を作ることに，後期はグループワークやプレゼン資料の作成に重点を置いて教育を行った．

情報処理は大学の情報環境に慣れる，Word・Excel・PowerPoint の操作を学び活用できることを重点に教育を行った．

情報社会は数理・データサイエンス・AI 教育プログラム（リテラシーレベル）に基づき，情報機器の発展や情報システムの歴史，AI の歴史や現在の利用状況についていくつかの動画や事例を利用し，この分野に興味を持たせるような教育を行った．

社会福祉外書講読は，福祉英語のテキストを基に，福祉・介護分野の紹介記事を読み，対象分野の理解を深めるような教育を行った．

情報通信技術を活用した教育に関する理論及び方法は教職の必修科目である．さまざまな教育機関で行われている ICT を利用した教材作成，授業運営について事例を通して紹介し，今後学生たちが ICT を利活用した授業計画を作成できるような情報を提供した．

社会福祉演習Ⅰ・Ⅱは 3 年生のゼミである．ゼミ生は教職希望学生 2 名，資格取得をしない学生 5 名である．教員が情報教育の専門であるため，DX をテーマに取り上げ，標準的な入門書の輪読を行い，社会生活や業務での ICT の利活用について学んでいる．また就職活動対策の一環として公務員試験の数的処理の問題を解き，輪読と同様にプレゼンテーション（人前で話すことに慣れる練習）を行っている．

情報処理演習では，情報関連の国家資格の入門的な位置づけである IT パスポートに関する内容を扱っている．IT パスポートは情報関連の資格ではあるが，すべての社会人が身につけるべき会社や仕事の仕組み，ICT の基礎知識が問われる試験であるので，非情報系の学生にはぜひ学んでほしい内容である．IT パスポートの書籍を用いて，内容の解説と過去問を用いた演習を課した．

４．学生からの評価と授業改善への努力

全体的にはおおむね 4 点台の評価を得ているので，これに安心せず，学生の満足度を向上させるよう，わかりやすく興味を持たせるような授業を心がけたい．

しかしながらどの科目も受講生が少なく，授業評価アンケートの回答数も少ない（実際回答なしの科目もあった）が，情報社会 A において，アンケートの項目９（雰囲気）の評価が 3 と最も低い評価があった．この科目では，特に目立った私語，居眠りは認められなかったため注意をする機会がなく，この評価になったことに疑問を感じるところではあるが，「そう思う（4 点）」と「どちらでもない（3 点）」の回答が多くなったための結果ではないかと推測している．

５．今後の教育目標

2025 年度から 4 年生ゼミを担当する．ここでは，3 年のゼミに引き続き，主として公務員試験対策，DX や IT パスポート等の情報教育の実践を行うが，学生の就職希望先も考慮した内容を考え，ゼミ生が積極的に参加できるゼミを運営していきたい．1 年生ゼミは今年度の内容を継続していく．

情報系の科目については以下のように考えている．

情報処理においては，Word・Excel・PowerPoint のスキル向上を目指す．

情報処理演習（演習とあるが実際は座学）では，社会人全般に求められる IT 関連知識の IT パスポート試験の教材による修得を目指す.

情報社会では，社会福祉・介護分野に関連の深い事例を利用して，数理・データサイエンス・AI 分野の歴史，現状を紹介していきたい.

新規科目として，全学生必修の「情報入門Ⅰ」「情報入門Ⅱ」と学部専門科目（選択）の「福祉・介護と DX」を担当する.

「情報入門Ⅰ」「情報入門Ⅱ」では，本学の情報環境に慣れること，人工知能に関すること（情報社会への導入を想定），統計的な処理（Excel を利用）を行う予定である．新 1 年生は高校で「情報Ⅰ」を必修科目として学んでいるため，授業内容には違和感がないであろうと期待している．オンデマンド教育を行うため，本学の情報環境に早く慣れることを期待している.

「福祉・介護と DX」では，DX の基本概念，ICT の基礎を紹介した後，福祉，介護，その他の分野でどのように DX を導入しているのかを事例を用いて紹介していく予定である.

以上

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　教授　石牧良浩

1. 教育の理念

本学の社会福祉学部社会福祉学科心理学専攻では、心理学の基礎と応用、カウンセリングの理論と技術、ならびに子ども、障害児・者、高齢者、精神障害者やその家族への心理的援助の基本姿勢である「傾聴」の技能と実践力を身につけ、公認心理師国家試験受験資格の取得を目指すとともに、他者の言動の背景を理解する姿勢を身につけることを目指している。公認心理師の業務として、①心理に関する支援を要する者の心理状態を観察しその結果を分析すること、②心理に関する支援を要する者に対し、その心理に関する相談に応じ、助言、指導、その他の援助を行うこと、③心理に関する支援を要する者の関係者に対し、その相談に応じ、助言、指導その他の援助を行うこと、④心の健康に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供を行うこと、の4つが挙げられている。石牧の担当科目は多くが心理学専攻・大学院臨床心理分野であり、子ども学専攻においても心理臨床関係の科目を担当していることから、上記①～④を実践できる人材の育成を念頭に置き、担当授業を実施している。

2. 担当授業の概要

心理学基礎演習Ⅰ
心理学基礎演習Ⅱ
社会福祉演習Ⅰ
社会福祉演習Ⅱ
総合演習Ⅰ
総合演習Ⅱ
社会福祉演習Ⅲ
社会福祉演習Ⅳ
総合演習Ⅲ
総合演習Ⅳ
卒業論文
卒業論文指導
保育心理技法
精神疾患とその治療Ⅰ
精神疾患とその治療Ⅱ
心理的アセスメント
幼児教育心理学
保育実習Ⅳ
心理演習Ⅰ
心理演習Ⅱ
心理実習
投映法特論（院）
福祉研究法（院）
臨床心理査定演習Ⅰ（院）

心理実践実習（院）
臨床心理実習Ⅰ（院）
臨床心理実習Ⅱ（院）
心理学特殊演習Ⅰ（院）
心理学特殊演習Ⅱ（院）
臨床心理学特殊演習Ⅰ（院）
臨床心理学特殊演習Ⅱ（院）
修士論文（院）
修士論文指導（院）
博士論文指導（院）

3. 教育の方法

心理臨床の現場では、臨床心理学をはじめとする心理学関係についての深い知識、技能とともに、周辺の学問領域への深い関心や守秘義務などの倫理観やクライエントと真摯に向き合い続ける粘り強さなどが求められる。また、心理学の研究対象である人の「心」は実態があるものではなく、把握が困難である。したがって、「主体的な学び」すなわち、学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学びが求められる。

それらをより具体的に学ぶため、担当する心理学関係の授業では、公開されている映像や事例を用い、イメージ形成がなされやすい授業になるように心がけている。また「対話的な学び」すなわち、クライエントとのかかわり、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学びについては、担当する授業ではアクティブ・ラーニングを多く取り入れた授業を実施している。大学院における心理臨床の技術（心理検査・心理面接等）の修得については、演習形式で体験から学べるようにすること、本学の心理臨床センターでの活動と座学・演習を関連付けることなどを通して、なるべく受講者がイメージしやすくなるよう心掛けている。

4. 学生からの評価と授業改善への努力

2023 年度の「心理的アセスメント」、「保育心理技法」、「幼児教育心理学」の学生による授業アンケートでは、授業の目的・内容、学生の授業への参加状況、教員の授業方法や態度、環境、学習の達成度・授業への満足度のいずれについても、全体の平均値を上回る回答値であった。特に、出席状況、教員の熱意、話し方、クラスサイズの満足度が高かった。「主体性」、「積極性」については、臨床で用いられている心理検査を体験してもらう形を取る、テキストの記述を説明するだけでなく、記述と関連する簡単な実験を取り入れる、などの試みによって評価が上がってきている。

2024 年度の同科目の授業評価アンケートでは、全体結果と比較して、すべての項目についてポイントを上回ったとともに、授業の感想（自由記述）は、「分かりやすい」「プリントが丁寧」「例えが適切で頭に入ってきやすい」などの回答であった。しかしながら、それで期末試験はしっかり点数が取れているかというとその限りではなく、「その場では納得して頭に入った気になるものの、後日しっかり想起できるかと言えばそうでもない」ということだと考えられ、今後の工夫・改善が求められる。

5. 今後の教育目標

2015 年に、本学に臨床心理士養成の大学院が創設されて、2024 年度で 10 年目になる。これまで、立ち上げた臨床心理分野を維持・運営していくことをせいいっぱい行ってきたが、今後は学外の実習のあり方にも目を向け、より座学や演習と関連付けた教育を行っていくようにしたい。

具体的には以下のとおりである。心理学専攻・大学院臨床心理分野では、学生が傾聴の姿勢、心理臨床の技術、倫理観などを身につけられるような教育を行うことが必須であると考える。それだけでなく、実習時やクライエントと向き合うときの基本的態度、提出物の期限を守ることなど、社会人として当然求められることも、しっかり指導していかなければならないと感じている。卒後教育としての、修了生へのスーパービジョンの件数も増えてきている。ケースへの考え方や助言が時代遅れのものにならないよう、日々学習し、知識や方法論についてのアップデートを行っていかなければならないと考える。

加えて、臨床心理士・公認心理師の試験の合格率を上げていくことも急務である。臨床心理士については、一次試験のみならず、二次の面接試験の対策をも含めた丁寧な指導を行っていきたい。また、臨床心理士と公認心理師は試験の出題傾向が異なるため、それぞれについてきめ細かな指導を行っていきたいと考える。公認心理師はまだ新しい国家試験であり、毎年の出題パターンを把握し、しっかりと対策を立てていきたい。

また、講義科目、演習科目問わず、学生１人１人からの声にも耳を傾け、授業内容も毎回時間をかけてアップデートしていくように心がけたい。

2024 年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　専任講師　伊藤　明代

１、教育の理念

学校教育が少子高齢化の課題を抱える近年、文部科学省の国際比較によると、日本は他国と比べて私立学校が多く、大学・短期大学の 8 割の学生・児童生徒が私立学校に通っていると明示されている。学校教育の発展を質・量の両面で支える私立学校・学校法人の振興が掲げられ、教育の裾野を広げるために各私立学校が独自の「建学の精神」に基づいて、多様で特色のある教育研究を展開するよう求められている。その中で本学社会福祉学部は、愛知県名古屋市西部に位置し、私立大学として東海北陸地域一帯の高等学校から学生を募集し、福祉専門職養成及び自律した社会人育成を質の面で支える役割を担う。特に、社会福祉専攻では、建学の理念である「同朋和敬」の精神を理解し、地域に根ざした社会貢献可能な人間を育てることを目指している。そのために、1 年次から段階的に、学生のコミュニケーションのレベルアップ、主体性の確立、2 年次には福祉実践基礎力（ソーシャルワーカーとしての基礎力）を高め、３年次、４年次は福祉実践力（課題を発見し様々な分野の人と協働・連携して実践的に取り組むことのできる力）を高めることとしている。

更に、伊藤が所属する介護福祉コースは、厚生労働省の管轄でもあり、2019 年、介護福祉士養成カリキュラム改正によって、求められる介護福祉士像 12 項目は、10 項目＋関連領域の基本的な理解＋高い倫理性の保持となっている。その倫理性の育成において、「同朋和敬」の精神を理解し、当事者や多職種、地域社会の人々と共に生きがいのある社会を目指していける豊かな人間性育成を目指している。

２、担当授業の概要

社会福祉学部において、主に生活における医学知識の理解、活用ができる科目を担当している。社会福祉学部専門基幹科目として、「こころとからだのしくみ 1/Ⅰ」「こころとからだのしくみ 2/Ⅱ」「こころとからだのしくみ 3/Ⅲ」「発達と老化の理解」を担当しており、50 名以上の学生が受講されていた。例えば、「こころとからだのしくみ 1/Ⅰ」では、生活に必要な基本知識として、器官系に分けた解剖生理学を教授している。自身の身体に異変を感じた時に、その異変を感じる部位にどんな器官があるのか、病院受診する時などに何科にかかれば良いのか、が分る点を到達目標としている。

介護福祉コースでは、「医療的ケア 1」「医療的ケア 2」「医療的ケア 3」「障がいに応じた支援 2」「社会福祉演習ⅠH」「社会福祉演習ⅡH」「社会福祉演習ⅢH」「社会福祉演習ⅣH」「介護福祉総合演習Ⅰ」「介護福祉総合演習Ⅱ」「介護福祉総合演習Ⅲ」「介護福祉総合演習Ⅲ」「介護福祉総合演習ケーススタディ」「介護福祉総合演習 3」「精神障害者の介護過程展開」「介護福祉実習Ⅰ－1（23 カリ）」「介護福祉実習Ⅰ－2（23 カリ）」「介護福祉実習Ⅰ-3

（23 カリ）」「介護福祉実習Ⅱ（23 カリ）」を教授しており、1～4 学年で各学年 5～17 名の学生に対して教授している。特に、今年度は、新カリキュラム、旧カリキュラムを同時開講することもあり、各学年に応じた問いかけを、講義内で行った。

３、教育の方法

2024 年度は、同朋和敬の精神を教育に生かす教育方法をより地域と実践的に行い、介護福祉コース教員間連携のみならず、学部教務委員として科目全体を理解して取り組んだ。加えて、2023 年度から開始となった介護福祉士養成新カリキュラムにおける実習や教育の提案を継続的に、主体的に実施し、新旧カリキュラム同時開講が最も多い年を、学生教員とも混乱無くスムーズに進められるよう整備した。

教員間連携強化については、学生の学習意欲の向上、コース会議における論点の提案による議論の活発化、新カリキュラムにおける介護福祉総合演習・介護福祉実習などオムニバス科目におけるスケジュールや内容のマネジメント、生活支援記録法という新記録導入の評価を実施した。

2023 年度介護福祉コース新カリキュラムにおいては、2 年目となるため、特に 2 年次生の新たな介護福祉総合演習の内容について、内容を検討した。

個別の伊藤担当の科目は、主に介護福祉士養成に関する科目のうち、上述した実習に関連した科目と「こころとからだのしくみ領域」科目という医学や公衆衛生学で占めている。

学生が、まずは自分自身の身体が、こころと共に生きているという関連を実感してもらえるよう、自分のこころ（行動に伴う思考である動機や意欲）と向き合うために、生活活動（移動・身支度・排泄・入浴）に即した ICF（International Classification of Functio:国際生活機能分類）の視点を教授し、生活において自分の行動から「こころとからだのしくみ」が観察できるよう、学生自身の実生活観察というアクティブラーニング型授業、2022 年度から継続して実践している。これは、一種のメタ認知能力を育成する教授方法であり、昨年同様一部の学生からポジティブな反応を得た。また「発達と老化の理解」講義内では、学生自身の幼少期の体験を振り返り記述する機会を持ち、高齢な家族や身近な人との体験を振り返っていただき、興味関心を引き出すように努めた。疾患については整理し、より多くの疾患に触れられるように、第 1 回の講義から、ナラティブベースの話を取り入れながら、興味が持てるような講義展開を行っている。

次に、精神障害者の介護過程の展開では、今年度も、アルコール依存・薬物依存当事者を外部講師に及びし、当事者の視点から支援を考えるようにした。疾患のある人のこころの動きを医学的観点から教授すると共に、時に対立の起きやすい医療職との連携や協働について共に当事者の困難に取り組む一因同士であるというエピソードを交え実践的内容が提供できるように実践した。

社会福祉演習では、介護福祉士・社会福祉士を目指す学生、福祉科教員を目指す学生と多様であったため、フィールドワーク先を複数設定した。NPO 法人 AYA（障がい児事業）、

社会福祉法人せんねん村（西尾市・高齢障がい複合事業)、NPO 法人ひょうたんカフェ（中村区・障がい事業所)、放課後等ディサービスりんりん（中村区・障がい事業所)、一般社団法人 HI FIVE（大阪府）など複数の事業所と連携して、学生が実践的に学べるフィールドワーク先を確保して、学びの機会とした。

４、学生からの評価と授業改善への努力

2024 年度前期・後期では、学生からの授業評価アンケートは、例年通り総合評価として概ね 4 以上を得た。特に専門基幹科目である「こころとからだのしくみ 2」、「こころとからだのしくみ 3」というこころとからだのしくみの科目は、前年度と同様「分かりやすい」という評価をいただいた。また、前年度から継続して、授業の到達課題を Forms 回答にして、匿名にして画面に表示し、講師がそれを読み上げて共有する、という授業方法は、概ね受け入れられている。今年度は、介護場面があるドラマを用いて観察し、それを記述するという演習を導入した。授業資料を用いて、実践的に記述する学生が増えた一方で、教室が広かったため、後方の学生は一定数、目を落としていた学生がいたことが次年度の課題である。

介護福祉コースでは 2023 年度入学生以降、新カリキュラムが進んでおり、今年度は 2 年次生が介護福祉実習Ⅱまで進んだ。本カリキュラムでは、経験型実習教育に類似した学びとなるため、各学生が、実習で体験したことを講義で言語化できるように授業内容の開発に取り組んだ。事前準備授業である介護福祉総合演習においては、事前学習やゲストスピーカーの工夫、ルーブリック評価によるレーダーチャート記載で、自身の到達を見える化できるようにした。その結果、どの学生も途中辞退することなく、2 年次における介護過程展開までにチャレンジすることができた。

社会福祉演習におけるフィールドワークでは、各フィールドワークの準備から、実施、報告まで学生が主体的にできるように、計画所の作成の方法、発表方法などを統一して行い、各学生から「こんなに障がいを持つ人との関わりが楽しいとは思わなかった。」「もっとボランティアにいきたい。」という意欲的な反応をいただいている。

５、今後の教育目標

令和 7 年度は、令和 6 年度に残した課題である「人材育成推進事業費補助金成長分野における即戦力人材輩出に向けたリカレント教育推進事業」の企画によって教材化されている動画を、新カリキュラムにおける「ICT を用いた介護過程の展開「こころとからだのしくみⅢ」で生かしていく。具体的には、社会福祉を学ぶ学生達が、Society5.0 の実現及びポストコロナ期を視野に、同朋和敬の精神の下、多様な出逢いやデータサイエンスを生かして行動できる人材を育成することを目指す。また、そのためには、医療とのジレンマに対峙する方法を知り、分野横断的に捉えて、社会を、人を捉えることができる人材を育てたい。

そのためには、2025 年度は、新カリキュラム 3 年目で本格的な介護過程の展開などの教育が開始するに当たり、本学建学精神に基づいた自身の教育方法とリカレント教育で行っていることを融合させていきたいと考えている。社会福祉法人貴和会における介護実習は 2026 年 2 月以降となったため、現場の実習指導者との調整を行う予定である。「こころとからだのしくみ」の授業内では、貴和会と連携したデータを活用し、学生がその読み取りができるようしていく。生活の場面におけるデータ読み取りは、身近なデータサイエンスとの出逢いであり、スモールステップでの教授方法を検討していくことで、本学にくる多様な学生が Sciety5.0 の実現ポストコロナ期を生きていく能力の育成になり、それが自身や家族を護る健康教育、延いては医療職と連携が図れる福祉職の育成にも繋がると考えている。

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部社会福祉学科
子ども学専攻/社会福祉専攻
人間学研究科仏教人間学専攻
人間福祉分野/臨床心理分野
井　上　　薫

1　教育の理念

「同朋大学の教育方針」は、次のように示されている。

> 本学は、「同朋和敬」の精神を建学の理念とし、「広く知識を授け専門の学術を教授研究し、併せて人格を陶冶し、人類文化及び社会福祉に貢献する人間を養成する」ことを教育方針としています。
>
> 「同朋和敬」の精神は、「共なるいのちを生きる」とも言い表し、一人ひとりの「いのち」を大切にし、お互いの異なりを認め合い、敬い合うことで和し、真の平等たる人間関係（同朋）を実現していくことを願いとしています。
>
> 建学の理念に立脚し、自らを照らし出し、自己とは何か、人間とは何かを問い、そして自己と社会の関係を探求し、主体性・責任感をもって、現代社会・文化の諸課題と向き合い、心の豊かな人間社会の構築に向けて、生涯にわたり関わり続ける人になることを願っています。

上記の本学の教育方針を受けて、筆者は、広い知識と専門の学術を、具体的には子どもの専門家あるいは社会福祉専門職としての知識、能力、態度を身に付けられるよう学生を応援することを基本的スタンスとする。

特に、「専門職として活動するときに大事にしたいことやめざすべき姿は何か（価値）」、「そのためにどんな知識、能力、態度・姿勢が必要か」「そのためにどんな取り組みをするか」「取り組みの結果うまくいったのはどこか、どこを継続・発展させるべきか、どこを改善すべきか」という問いを立てながらすすめることが最も大事だというモデルに従い、学生の学び（探求）の旅を応援することとしたい。

別の言い方をすると、考察対象について広く深く考え抜くこと（「対象世界との出会いと対話」）、多様な背景を持った人と対話をすること（「他者との出会いと対話」）、自分自身の関わりを考え抜くと（「自己との対話」）を自ら行っていく専門的職業人になるのを応援することとする[i]。

2　2024年度担当授業の概要

「児童・家庭福祉総論」（講義、保育士・社会福祉士）

「幼児理解と教育相談」（講義、幼稚園教諭・保育士）

「子ども家庭支援の心理学」（講義、保育士）
「保育実習指導Ⅰ-２」（演習、保育士）「保育実習Ⅰ-2」（実習、保育士）
「総合演習Ⅰ・Ⅱ」「社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ」（専門３年ゼミ）
「総合演習Ⅲ・Ⅳ」「社会福祉演習Ⅲ・Ⅳ」（専門４年ゼミ）
「卒業論文」「卒業論文指導」
「児童福祉臨床研究」（大学院）
「家族心理学特論」（大学院）
「心理学特殊演習Ⅰ」（大学院）

３　教育の方法

「児童・家庭福祉総論」（講義）、「幼児理解と教育相談」（講義）、「子ども家庭支援の心理学」（講義）においては、教科書を指定し、教科書の内容に沿いつつも、毎回何らかのトピックスを取り上げ、トピックスについて、深めるための知識・情報提供を行う。特に、各学問分野における「価値」、すなわちなんのためにその学問があるか、重要な価値は何かを学生が自ら説明できるようになることを授業の目標とする。例えば、「ウェルビーイング」「心の健康増進」「子どもの最善の利益」などである。

「保育実習指導Ⅰ-２」・「保育実習Ⅰ-2」は保育士資格のための児童福祉施設（保育所・認定こども園を除く）における実習（10 日間）とその事前事後指導の科目である。学生は、施設保育士になるために必要な知識・技能・態度を身に付けることを目標とするが、大学での講義・演習を通した学びと、現場での子ども（利用者）の姿や職員の様子の観察、実習生自身の利用者とのかかわり体験をつなげ、実習のまとめの執筆、体験報告会などの省察を通じて、総合的な学びとなるようにする。

３年ゼミと４年ゼミでは、２年間一貫してゼミ生が「対象世界との出会いと対話」、「他者との出会いと対話」、「自己との対話」を探求していけるよう支援する。

「総合演習Ⅰ・Ⅱ」「社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ」（専門 3 年ゼミ）においては、基礎知識の整理の仕方、調査の仕方、発表の仕方、討論の仕方、ふりかえりの仕方について訓練していく。それと並行して、社会問題について、自らを関与させて課題解決に向かう実践的発想を身に付けることを目標とする。また、学生によるオレンジリボン運動に参加し、学生による子ども虐待防止活動による、学生の主体的な学びを支援する。

「総合演習Ⅲ・Ⅳ」（専門４年ゼミ）においては、学生によるオレンジリボン運動を継続・発展させる。さらに、４年間の仕上げとして、子どもの専門家または社会福祉専門職としての教養・技術・態度等を身に付け、これらを自ら立てた課題の解決、一人ひとりの子ども・利用者の支援に総合的に活用できるようにする。具体的には、ゼミ論を卒業研究として位置づけ、基礎知識を踏まえたうえで、独自の調査・独創的な論考を行えるように支援する。

「卒業論文指導」においては、テーマの設定、研究方法の検討、調査・実験方法の検討、分析、論文執筆、卒論発表会のリハーサルまで丁寧な指導を行う。

「心理学特殊演習Ⅰ・Ⅱ」は、大学院前期課程の院生に対する指導教員による演習科目である。本科目で扱う領域は二つあるととらえている。第 1 に修士論文指導を行うことであり、第 2 に指導教員として心理専門職に向けての発達を支援することである。そのために、二つの領域について、目標設定、目標に向けての個人のリソースの確認、目標に向けてのステップなどを担当教員の持っているフレームワーク（三つの家、ブリーフセラピー、安全パートナリング）から援用したやり方で、学生に問いかけ、学生自身が自らの道を進めるよう応援する。修士論文指導においては、テーマの設定、先行研究のレビュー、研究計画作成、倫理審査申請、実験・調査実施、分析、論文執筆、修士論文報告会まで、対面と TEAMS 等のシステムの両方を組み合わせた丁寧な指導を行う。

４　授業改善への努力

2024 年度のふりかえりをする。また、前期の「子ども家庭支援の心理学」、後期の「幼児理解と教育相談」については、学生が興味を持てるように学生への課題や事例の提示、学生からの報告に基づいた授業展開、を中心に組み立てた。

実習については、実習先や学生の協力もあり、何とか履修予定の実習を終えることができた。「保育実習指導Ⅰ-２」・「保育実習Ⅰ-2」について、実習日誌の冊子の中にある「施設による学生評価」「学生の自己評価」の評価項目を中心に始動した。保育士に必要な態度・知識・技能の 3 つの観点（視点）を示し、あわせて学生・施設向けの実習のねらいも評価項目と関連付けた。こうすることで、教員、学生、施設職員が実習の「目標」と「評価」で、共有できる観点を持つことができ、学生にとってわかりやすい学びの観点になると考えた。受講生は、何を学ぶか、明確に意識して取り組むことができたと考える。具体的な根拠は、日誌及び実習報告書に表れている。

3 年・4 年ゼミについては、学生たちが積極的に自分たちの学びを進め、一定の成果を上げることができた 3 年ゼミ、4 年ゼミとも、学生によるオレンジリボン運動に取り組み、その成果を S 学会ジャーナルへの投稿などを行った。3 年ゼミでは、高大連携事業 1 コマ分（50 分）をゼミ学生が担当するなど、学生が高校生に教える体験をして、そこからゼミ生が学ぶなどの有意義な学びの体験を提供することができた。4 年ゼミの運営では、学生たちにゼミの進行をかなりゆだねて、学生が自分たちの学びを作っていくようにした。その結果、学生たちの中からゼミに内容や信仰を提案するなどリーダーシップを発揮できる学生が現れたり、自分たちの学びを自分たちで決めていこうとする傾向が高くなった。

卒業論文指導においては、ゼミの時間内の指導と併せて、卒業論文指導の時間を設け、集団学修及び個別指導によって卒業論文指導を行う。

５　今後の教育目標

（1）2025 年度の担当科目

「児童・家庭福祉総論」（講義、保育士・社会福祉士）

「幼児理解と教育相談」（講義、幼稚園教諭、保育士）
「子ども家庭支援の心理学」（講義、保育士）
「保育実習指導（施設）」（演習、保育士）・「保育実習（施設）」（実習、保育士）
「総合演習Ⅰ・Ⅱ」「社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ」（専門３年ゼミ）
「総合演習Ⅲ・Ⅳ」「社会福祉演習Ⅲ・Ⅳ」（専門４年ゼミ）
「卒業論文」「卒業論文指導」
「児童福祉臨床研究」（大学院）
「家族心理学特論」（大学院）
「地域子育て支援研究」（大学院、隔年開講科目）
「特殊演習Ⅰ・Ⅱ」（大学院、人間福祉分野、ただし受講生の履修登録による）
「心理学特殊演習Ⅰ・Ⅱ」（大学院、ただしⅠについては受講生の履修登録による）

（2）今後の教育目標

筆者の教育理念（願い）を目指し、良かった点は継続・発展させ、課題は改善策を作り実行・振り返りを行い、さらに改善していきたい。

学生が学びを実感できるように、アクティブラーニングの要素を増やす。具体的には、授業時の配布資料を工夫し、演習問題・課題の準備、学生のミニ報告の分析に時間とエネルギーを用いる。

2025 年度は、５年目となる「子ども家庭支援の心理学」（講義、保育士課程科目）と「幼児理解と教育相談」（演習、幼稚園教職・保育士課程科目）の授業展開の充実を図ることとする。これらの科目については、特に身に付けてもらいたい内容を精選し、実際の例を学生に見る・読む機会を提供し、リアルに感じられるようさらに工夫したい。

「保育実習指導（施設）」・「保育実習（施設）」について、保育士に必要な態度・知識・技能の 3 つの観点（視点）を示し、あわせて学生・施設向けの実習のねらいも評価項目と関連付けた。こうすることで、教員、学生、施設職員が実習の「目標」と「評価」で、共有できる観点を持つことができ、学生にとってわかりやすい学びの観点になると考えた。

「心理学特殊演習Ⅱ」については、実験・調査実施、分析、論文執筆まで対面と TEAMS 等のシステムの両方を組み合わせた丁寧な指導を行い、受講生が研究能力の基礎をしっかり身に付けるように支援する。

2025 年度は、授業研究も試みながら効果を確かめたい。

[i] 学びについての３種の対話については、次の文献を参考にした。佐藤学（1996）『学びの快楽―ダイアローグへ』世織書房。

2024 年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　准教授　岩瀬真寿美

１、教育の理念

本学の教職課程では「自らのいのち（存在）と向き合うことで一人ひとりのいのち（存在）と出会い、そこから真実の道を求め、開いていく教師」の養成が本学教員養成の理念であり、以下の目的に重点を置きながら、全学的な協力・指導体制をもってこの理念に取り組み、「共なるいのちを生きる次世代の教育者」を養成するとされている。その目的とは、「１、人類文化及び社会福祉に貢献する確かな教育力の育成」「２、社会性を持ち、広く豊かな教養に支えられた実践的指導力の養成」「３、一人ひとりのいのち（存在）と出会い、そこから真実の道を求め開いていく自己教育力の獲得」である。著者の担当科目は、その多くを教職課程の科目によって占めていることから、社会福祉への貢献姿勢、広く豊かな教養の獲得、真理の探究に担当科目の中でいかに学生が取り組んでいくことができるかが問われると考え、担当授業を実施している。

２、担当授業の概要

社会福祉演習Ⅰ,Ⅱ　　社会福祉演習Ⅲ, Ⅳ

【教職科目】教師論　　【教職科目】教育演習（事前指導）/（事前事後指導）

【教職科目】教育実習１・２　　【教職科目】教職実践演習（中・高）

【教職科目】教育原理　　【教職科目】道徳の理論及び指導法

【大学院科目】教育哲学研究

仏教と福祉　　宗教と人間（釈尊と現代）　　卒業論文、卒業論文指導

３、教育の方法

小中高等学校では新学習指導要領への移行に伴い、時代と共に移り変わるカリキュラムとして、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という理念を学校と社会とが共有すること、カリキュラム・マネジメントをとおして教育課程の改善、教育活動の質の向上の実現が目指されている。したがって、主体的・対話的で深い学びを担当する教職課程の授業科目においてもそれらについて工夫している。具体的には、「主体的な学び」について、4 年間を見通した教職履修カルテを活用している。「対話的な学び」については、アクティブ・ラーニングを多く取り入れた授業を実施している。「深い学び」については、模擬授業実践を多く取り入れながら、学習者が何をできるようになるのかに着目することの重要性を履修生に繰り返し伝えている。

４、学生からの評価と授業改善への努力

特に受講者数が多い「仏教と福祉」については、熱意のある話し方が響いたという評価

や、仏教の福祉との関わり方を十分に学べたといった学生からの良い評価がある一方で、各回の課題が重いといった改善の必要性も指摘されたため、今後の課題としたい。教職科目の総まとめである「教職実践演習」については、分かりやすくて、学べることが多い授業であった、今後の教員になった際に活かしたいという良い評価が目立った。さらに実践的に役立つような内容にしていきたい。

５、今後の教育目標

教員採用試験については、本学の当面の目標として、教員志望者の免許取得率１００％および採用試験合格率３０％を目指していることから、学生には授業以外でも個別に教員採用試験の詳細の連絡および指導を継続して実施したい。また今後さらに、教職課程の学生が模擬授業等に ICT 活用場面を盛り込むといった場面を担当授業に多く取り入れたい。具体的には、インターネットの活用、画面上の付箋に書き出し、画面上で分類、カメラ付端末等を活用し自分の話し方を確認、動画を通して言葉の響きやリズムに親しむ、モデルとなるスピーチ動画を視聴し、学習の見通しをもつといった活動を自身の模擬授業に取り込むなどである。

2024 年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　准教授　牛田　篤

１、教育の理念

本学の社会福祉学部社会福祉学科社会福祉専攻では、「同朋和敬」の精神を建学の理念とし、1961（昭和 36）年に文学部社会福祉学科として創立されて以来、この理念を礎に同朋福祉を実践している。1984（昭和 59）年には、社会福祉学部社会福祉学科となり、現在では「社会福祉専攻」「子ども学専攻」の二専攻を設けている。そして、社会福祉専攻では「社会福祉専門職」の養成を目指し、さらに社会貢献をも目指している。

本専攻では、「同朋和敬」の精神のもと、広い知識と専門の学術を身につけ、社会福祉・教育・心理・経済行政など、地域社会に貢献可能な人間を養成することを目的として、その実現のためのカリキュラムを編成している。自ら課題をみつけようとする姿勢や考え方、またそれら課題解決の方法や判断について体系的・総合的に学修が進められるようにカリキュラムを組み立てている。学生の所属コースの学問的方法を学ぶために、専門教育科目・教養共通科目・自由科目を配置し、教養、自由の科目を履修することによって、専門性のみならず、応用力、洞察力等を身につけ、総合的な学びができるよう配慮している。

前述について、具体的には初年次教育の充実のため、１年次より介護福祉コースの学生たちに対しては、社会福祉専攻主任として通年指導や支援、少人数教育を行っている。 4 年間を通じた少人数教育によって、学生のコミュニケーションのレベルアップ、主体性の確立等を図っている。２年次以降には「講義」「演習」によって福祉実践基礎力（ソーシャルワーカーや介護福祉士としての基礎力）を高め、３年次、４年次には「演習」「現場実習」を重視し、福祉実践力（課題を発見し様々な分野の人と協働・連携して実践的に取り組むことのできる力）を高めることを目指している。

そこで、筆者の担当科目では、その多くを介護福祉士養成に関する科目によって占めていることから、社会福祉学の中でも、求められる介護福祉士像に関する知識と技術、または介護概論において超高齢社会における介護に関する基礎知識の獲得、介護福祉分野における ICT、IoT の活用について、それらの担当科目の中でいかに福祉実践基礎力が身につくように担当授業を実施している。

２、担当授業の概要

人間関係の形成とコミュニケーションの基礎（全学部履修）旧カリ・新カリ
チームマネジメント（全学部履修）旧カリ・新カリ
チームコミュニケーション技術（介護福祉コースのみ）旧カリ
介護過程の構成要素（介護福祉コースのみ）旧カリ・新カリ
介護福祉総合演習１（介護福祉コースのみ）旧カリ

介護福祉総合演習２（介護福祉コースのみ）旧カリ
介護福祉総合演習３（介護福祉コースのみ）旧カリ
介護福祉総合演習４（介護福祉コースのみ）旧カリ
介護福祉総合演習Ⅰ（介護福祉コースのみ）新カリ
介護福祉総合演習Ⅱ（介護福祉コースのみ）新カリ
介護福祉総合演習Ⅲ（介護福祉コースのみ）新カリ
社会福祉演習ⅠＥ
社会福祉演習ⅡＥ
社会福祉演習ⅢＶ
社会福祉演習ⅣＶ
生理的ニーズへの介護（介護福祉コースのみ）旧カリ
セーフティニーズへの介護（介護福祉コースのみ）旧カリ
介護技術基礎演習（介護福祉コースのみ）旧カリ
介護概論Ａ（介護福祉コースのみ）旧カリ・新カリ
介護概論Ｂ（介護福祉コース以外）
生活支援技術Ⅰ-1（介護福祉コースのみ）新カリ
生活支援技術Ⅰ-2（介護福祉コースのみ）新カリ
生活支援技術Ⅱ-1（介護福祉コースのみ）新カリ
生活支援技術Ⅱ-2（介護福祉コースのみ）新カリ
介護福祉実習Ⅰ－1（介護福祉コースのみ）旧カリ・新カリ
介護福祉実習Ⅰ－2（介護福祉コースのみ）旧カリ・新カリ
介護福祉実習Ⅰ－3（介護福祉コースのみ）旧カリ・新カリ
介護福祉実習Ⅱ（介護福祉コースのみ）旧カリ・新カリ
介護概論（名古屋音楽大学）

３、教育の方法

2019 年、介護福祉士養成カリキュラム改正によって、求められる介護福祉士像 12 項目は、10 項目＋高い倫理性の保持となっている。前述の改正に伴い、2019 年度入学生からは、①チームマネジメント能力を養うための教育内容の拡充、②対象者の生活を地域で支えるための実践力の向上、③介護過程の実践力の向上、④認知症ケアの実践力の向上、⑤介護と医療の連携を踏まえた実践力の向上に関する知識と技術を身につける必要がある。そのため、前述を意識した主体的な学びが重要であるため、アクティブ・ラーニングを積極的に取り入れた授業を実施している。2019 年度以前の入学生に対しても、昨今の介護福祉士に具体的に何が求められているか、カリキュラム改正の要点を押さえた教育を実施している。さらに介護実習においても、より実践的な介護過程の展開、多職種協働の実践、地域における生活支援の実践を深める必要がある。そこで、受講生は事前指導、巡回指導や帰

学日指導、事後指導においては、常に「観察」「コミュニケーション」「報告・連絡・相談・調整」によって、根拠ある介護福祉実践を意識しながら教育を実施している。介護概論では、超高齢社会、地域包括ケアシステム、地域共生社会、認知症ケア、諸外国の高齢化率、介護福祉分野における ICT、IoT の活用等、テキスト、映像教材を活用しながら授業を実施している。さらに、各学生の学習状況を可視化し、双方向のコミュケーションを円滑に行うため、Teams、DOHO ポータル等の機能を積極的に活用しながら授業を実施している。

最後に、求められる介護福祉士像には、介護職の中核的な役割という項目が追加されている。よって、履修学生には「マネジメント」能力を養うため、「チームケア」「リーダーシップ」「フォローシップ」「メンバーシップ」を意識するように、アクティブ・ラーニングを実施している。そして、将来どのような専門職として勤務する場合であっても、学生一人ひとり障がい者や高齢者との共生意識が重要であり、支援する際は「尊厳」「自立支援」「QOL」「自己実現」の視点から考えて行動するよう繰り返し伝えている。

４、学生からの評価と授業改善への努力

2019 年度前期から現在に至るまで、学生からの授業評価アンケートは、総合評価として概ね 4 以上を得ている。授業評価アンケートについては、自由記述に関しても、学生への対応についてプラスの記載、評価のコメントを得ている。一方、各評価項目では、事前、事後課題に関して、さらに増やす必要があるようである。ただ、学生の学力差があるため、工夫が必要である。2019 年度は学生に配慮していたが、2020 年度以降は、具体的に事前学習として何を学ぶとよいか指示し、事後課題では毎回の授業が振り返り機会となるように、Teams や DOHO ポータルを活用しながら実施するように取り組んでいる。その際、2023 年度以降は、多様な学生に対して、共通の理解ができるように、teams を毎回活用し、重要な内容やポイント、動画の投稿等を意識して活用している。

５、今後の教育目標

担当する授業では、学生（授業評価アンケート等）からある程度の評価を得ている。今後、毎回の授業では、継続して具体的な教育及び、積極的なアクティブ・ラーニングや全国的な介護福祉実践の紹介を継続したい。また、介護福祉士取得を目指す学生には、国家試験を一発合格できるように、介護福祉教育では、全体像を示しながら常に細分化と統合化の視点から説明し、基礎的な知識が身につくよう徹底して教育したい。そして、各介護実習や社会福祉法人貴和会との連携によって、介護過程の展開、生活支援技術、チームコミュニケーション技術、マネジメント能力について、より実践的且つ応用的な能力を身につけることができるよう教育したい。さらに、社会福祉基礎演習、社会福祉演習では、学生の長所を活かし、就職活動も含めて丁寧に指導したいと考えている。

また、厚生労働省では、介護現場における ICT、IoT の活用、介護ロボットの導入を推奨している。本学では、2022 年度「介護福祉×DX」、2023 年度「高齢者福祉×DX」と、文

科省のリカレント教育推進事業について採択を受けた。その際、一委員として様々な動画作成、パンフレット作成を行った。完成した内容は、そこで、2024 年度、介護福祉の「DX 理論講座」と「DX 実践講座」といったリカレント教育の運営を担当した。さらに、第 30 回日本介護福祉教育学会体会において、座長を担い、前述の内容について、「介護福祉分野における DX 研究を活かした教育と実践のあり方」を口頭発表し、2025 年度に日本介護福祉教育学会の学会誌にて論文投稿される。今後もさらに介護福祉分野を目指す人材や、今後のキャリア教育に役立つように取り組みたいと考えている。介護概論や介護福祉士養成カリキュラムの科目等では、先に述べた動画やパンフレットを活用し、介護現場における介護ロボットの適切な知識、ICT、IoT、AI の活用を教育できればと予定している。

今後の教育では、生活支援技術や介護実習において、タブレットやスマートフォンを使用した授業を実施したい。さらに、2023 年度、2024 年度に、第 5 回、第 6 回飛騨高山学会大会に参加し、飛騨高山大学連携センターや白川郷合掌造りの旧遠山家等との連携を進めている。そこでは、VR を活かした教育について発表している。今後の共育では、具体的に、VR 装着による演習、もしくはタブレットやスマートフォン、各種介護機器を活用し、その演習の様子を録画、その録画した内容を各自視聴しながら、お互いの良い点、改善が必要な点をグループ間で話し合う機会を設けたい。さらに、モデルとなる演習の動画は、随時視聴できる環境を整え、事前、事後学習の改善に努めたい。

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　専任講師　太田和佐

1．教育の理念

本学は、「同朋和敬」の精神を建学の理念とし、これをもとに同朋福祉を実践してきた。心理学専攻では「心理学の専門家」となることを目指し、さらに社会貢献も目指している。期待する学生像として、1．「同朋和敬」の精神に立脚し、心理学に関する基礎的な知識・技能を学ぶことができる人。2．その知識・技能を活用して自ら課題を発見し、その解決に向けて探求することができる人。3．それらの成果等を表現するために必要な思考力・判断力等の能力を身につけたいという意欲のある人。が掲げられ、心理学の専門家として地域社会に貢献可能な人間を養成することも目的としている。

また、心理学専攻にて取得可能な公認心理師の業務として、①心理に関する支援を要する者の心理状態を観察し、その結果を分析すること、②心理に関する支援を要する者に対し、その心理に関する相談に応じ、助言、指導、その他の援助を行うこと、③心理に関する支援を要する者の関係者に対し、その相談に応じ、助言、指導その他の援助を行うこと、④心の健康に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供を行うこと、の4つが挙げられている。太田の担当科目は、多くが心理学コース及び専攻、大学院臨床心理分野科目であるため、本学の理念や心理学専攻の目的に加え、上記①～④を実践できる人材の育成を念頭に置き、担当授業を実施している。

2．担当授業の概要

〈学部科目〉

心理学基礎演習Ⅰ
心理学基礎演習Ⅱ
心理学概論
臨床心理学概論
心理学研究法
産業・組織心理学
特別支援教育Ⅰ
心理学実験
心理演習Ⅰ
心理演習Ⅱ
心理実習

〈大学院科目〉
臨床心理実習Ⅰ
臨床心理実習Ⅱ
心理実践実習

3．教育の方法

「知識・理解」の面において、心理学の専門分野における基本的な知識を習得するため、日常における具体的な例等を用いて、丁寧に説明するとともに、スライド等を活用し、図や表等、視覚的にも理解しやすい授業づくりを心がけている。特に1年次の「心理学概論」では、大学において初めて講義を受ける年次ということを念頭に置き、興味の持てる内容を吟味し、課題解決型学習を取り入れ、体験的に心理学の面白さを伝えることができるような授業づくりを行っている。

同様に、演習以外の講義においても、グループワーク等を積極的に取り入れている。グループワークは、コミュニケーション能力を上げる上でも効果があり、授業のテーマに関連した内容をグループで体験することで学びを深めることができるような工夫をしている。

また、講義の最後の時間に振り返りシートを用い、講義の内容のまとめと印象、感想、気づき、質問等、自分の考えをまとめて記述することで、文章力や思考力等を高めることができるよう心がけている。

さらに、予習・復習の実施を積極的によびかけ、主体的に学ぶ力を育てている。

自身も心理学専攻に在籍している多くの学生が目指している心理職であることから、学生が将来心理学の専門家になる際に、心理職の態度のモデルのひとつとなるように、学生と相対するときは、傾聴の姿勢で、丁寧に関わることを心がけている。

4．学生からの評価と授業改善への努力

授業で配布しているレジュメや資料については、「わかりやすい」「資料が豊富で読み応えがある」「配布資料も多すぎず、振り返りしやすい」等のコメントが授業アンケートより、寄せられている。

また積極的に取り入れている体験型の学習（アクティブ・ラーニング）については「ワークなどを行ってとてもわかりやすく感じました」「興味が湧くものばかりでとても楽しかったです」「実践的なワークがとても面白かった」等、多くの授業で高い評価を得ている。

とくに、毎回講義の後半にて、グループワークを取り入れた「産業・組織心理学」の授業アンケートのコメントからは「ワークの時間が様々な意見の交換の時間で楽しかった」「いろいろなグループワークがあり、さまざまな意見が聞けるので楽しかっ

た」「コミュ障を直す上でこの上無い授業だったと思う」「グループワークが、他の授業であまりできるものではなく、社会人になってからも役立つものなので楽しい」等、特色のある授業ができていることがうかがえた。

2024 年度は着任初年度につき、不慣れな授業内容も多々あったことから、時間配分等が不十分であった講義も生じた。2025 年度はこれらを踏まえ、学生が無理なく、落ち着いて、十分な理解ができるような環境も含めた有意義な授業づくりができることを心がけたい。

5．今後の教育目標

2024 年度は着任初年度につき、手探りで実施している部分が多かった。学生からの授業評価を真摯に受け止め、内容や構成ともに全体的にブラッシュアップしていくとともに、担当講義の多くが公認心理師や臨床心理士関連の科目であるため、2025 年度は、数年後に学生がこれらの資格試験を受験することも十分に配慮した授業づくりを心がけたい。

25.02.14

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　大橋徹也

１．教育の理念

同朋大学では,「人間とは何かを問い、そして自己と社会の関係を探求し、主体性・責任感をもって、現代社会・文化の諸課題と向き合い、心の豊かな人間社会の構築に向けて、生涯にわたり関わり続ける人になること」を最終的な教育の目標として,その方針を示している．さらに，１．知識・理解，２．汎用的技能，３．態度・志向性，４．総合的な学修経験と創造的思考力の４つを身につけるようにしている．

上記の方針に則り，社会福祉の専門職として地域における福祉の向上に貢献する専門家を輩出するよう努めている．

２．担当授業の概要

2.1 講義系科目

(1)　前期（春期）ソーシャルワークの方法Ⅰ
(2)　前期（春期）ソーシャルワークの理論と方法Ⅰ
(3)　前期（春期）ソーシャルワークの方法Ⅲ
(4)　前期（春期）ソーシャルワークの理論と方法Ⅲ
(5)　前期（春期）発達障害児総論（知的障害者）
(6)　後期（秋期）ソーシャルワークの方法Ⅳ
(7)　後期（秋期）ソーシャルワークの理論と方法Ⅳ
(8)　後期（秋期）障害者に対する支援と障害者自立支援制度
(9)　後期（秋期）障害者福祉論

2.2 演習系科目

(1)　前期（春期）社会福祉基礎演習Ⅰ
(2)　前期（春期）ソーシャルワーク演習Ⅰ
(3)　前期（春期）社会福祉演習Ⅰ
(4)　前期（春期）社会福祉演習Ⅲ
(5)　後期（秋期）社会福祉基礎演習Ⅱ
(6)　後期（秋期）ソーシャルワーク演習Ⅱ
(7)　後期（秋期）社会福祉演習Ⅱ
(8)　後期（秋期）社会福祉演習Ⅳ

2.3 実習系科目

(1)　前期（春期）ソーシャルワーク実習指導Ⅱ

(2)　随時ソーシャルワーク実習Ⅰ

(3)　随時ソーシャルワーク実習Ⅱ

2.4 卒業論文

(1)　後期（秋期）卒業論文指導

(2)　随時卒業論文

３．教育の方法

3.1 講義系科目

新たに導入された新カリキュラムに基づいた社会福祉士課程・精神保健福祉士課程，介護福祉士課程，及び保育士課程，特別支援教育課程に即した授業を行っている．各科目には，指定された目標とそれぞれ個別の内容が示されている．そのため，これらの規準を充足するよう講義する．そのためには，社会福祉士課程に準拠したテキストを指定して精神保健福祉士課程，介護福祉士課程，及び保育士課程にも対応できるよう実施している．IFSW(International Federation of Social Workers)が示したソーシャルワークの定義，ソーシャルワークにおける価値の理解，及びこれらを実現するための方法であるアプローチについて講義している．加えて，社会的な要請や援助科学の進展に応じて改訂された新しいカリキュラムに即した内容を取り入れた．本年度はとりわけ新たに導入された新カリキュラムに基づき，地域における多様なニーズに対応できるソーシャルワークの専門家に求められる地域連携を重視した．新たに求められるこれらの専門性の必要性とその実際について具体的な説明を加えて実践における展開をできるように努めた．さらに，及びソーシャルワークの発展に必須である事例検討と事例研究を重点課題として講義を実施した．特別支援教育課程についての学習では，少人数であることを活かしてグループを構成した学生自身によるアクティブラーニングによって学習を主に行っている．

3.2 演習科目

演習系科目では，新カリキュラムにおける目的を念頭に上記の社会福祉士課程のそれぞれの具体的なねらいについて，学生自身によるアクティブラーニングによる学習を行っている．また，グループダイナミックスを活用した学習を実施し，卒業後の業務に役立つようより実際的に学ぶようにしている．さらに必要な基盤となっている理論については，毎回において十分な時間をかけて説明を加えた．

3.3 実習系科目

実習系科目について，実際のサービス提供機関における体験的な学習であることから，実際にサービス利用者と接することから，ソーシャルワークの対象と対象者の範囲，それらの特性の理解を基礎に，知識を臨床照らして理解することを重視している．あわせて，機関の仕組みや運営の実際を知り，法人に所属して援助業務を行うであろう学生にとっての将来的な職業理解の機会としても成果ができるように指導した．これらにより，新カリキュラムにおける実習の 180 時間で学習が必要とする事項を網羅した．加えて，今年度から開始された地域を重視したソーシャルワーク実習Ⅱについては，その主旨に則り地域支援の意義・これに求められる機関の機能・役割，同じく社会福祉士による職務が修得できるよう指導した．

実習中の予想されなかった場面に戸惑う学生と配慮を要する学生の実習では個別的な対応を行った．

3.4 卒業論文科目

卒業後におけるソーシャルワーク実践やケースワークが，個別や地域の支援で終わらず学習者のキャリアや生涯学習など，社会における資産として活用できることを目標として，学生自身が社会福祉にかかわるテーマを設定することを援助し，実際に調査を自身が行って分析・考察し，問いに対する自らの発展的な解の探求を重視して行った．

４．学生からの評価と授業改善への努力

評価については，アンケートや直接得られたメッセージなどを要約すると，講義系については，意見が大まか２つに分かれる．１つはマイクの使用方法についての意見，他は授業時刻である．開始については，前の授業終了直後や 20 分前には教室に入っていること，終了についてはギリギリかもしくは質問できるよう時間を確保することがあったためと考えられる．改善すべき点については，上記の２つから集約されるマイク音量などの確保やあまり早すぎない教室への入室，空調音も考慮したマイクの適切な使用を行いたい．

５．今後の教育目標

卒業論文科目の指導と同様，学生がその生涯における個別の具体から抽象を抜き出し，その知見を再び援助を要する人々に還元できる能力を身につけることが教育目標である．

2024年度ティーチング・ポートフォリオ

社会福祉学部　小沢　日美子

Ⅰ．教育研究者としての理念と実践

私は教育研究者として、「生涯発達における主体的学びの育成」を中核的な理念として掲げ、研究と教育の統合的な展開を目指してきた。この理念は、発達心理学の理論的基盤と教育実践の経験的知見の融合から導き出されたものである。

Ⅱ．理論的基盤と研究アプローチ

発達心理学を専門とする研究者として、人間の生涯に渡る発達過程における「自己の確立」と「社会的適応」の相互作用に着目してきた。特に、個人が自らの発達課題に気づき、それに主体的に取り組んでいく過程での認知的・社会的要因の解明を研究の中心に据えている。この研究視座は、教育実践において「情報活用能力の涵養」、「自己認識力の育成」、「主体的思考力の確立」という三つの具体的目標として具現化されている。これらは互いに連関し、学習者の生涯発達を支える統合的な能力形成を目指すものである。

Ⅲ．教育実践における具体化：担当科目の体系

1. 大学院担当科目
   - 特論科目
     - 教育心理学特論（現在も担当）、発達心理学特論（現在も担当）
     - 臨床心理面接特論Ⅱ（過去に担当）
   - 研究指導
     - 修士論文研究指導補助教員
2. 学部心理学系科目群
   - 基幹科目
     - 心理学Ａ・Ｃ（履修者74名、145名）：両学部共通の基礎的心理学科目
     - 発達心理学（56名）：生涯発達の理論と実践を統合的に学ぶ
   - 資格関連科目
     - 社会福祉士、介護福祉士、公認心理師、保育士、傾聴士、保育心理士、認定心理士に関わる専門科目
3. 教職系科目群
   - 教職の基礎理論科目
     - 教育心理学Ａ・Ｂ（54名、111名）、発達教育学（57名）
     - 特別支援教育の理解（30名）
   - 実践的指導法科目
     - 教育相談（31名）、生徒指導と進路指導（28名）
   - 教育実践科目
     - 教育演習、教育実習の指導（過去に担当）
4. 専門教育科目
   - 社会福祉演習（U）Ⅰ～Ⅳ、論文指導・卒業論文（社会福祉学部選択必修）登録者

これらの科目群では、学部から大学院に至る段階的な教育実践を展開している。特に大学院教育においては、理論的知見と実践的スキルの統合、研究的視点の育成に重点を置き、以下の特徴的な教育実践を展開している：

1. 発達的視座の一貫した適用
    - 各科目の内容を学習者の将来的発達課題と明確に結びつけ
    - 知識獲得を超えた実践的スキルの育成を重視
2. 双方向的な学びの場の創造
    - Teams, Forms, DOHO ポータルを活用した即時的フィードバック
    - グループワークを通じた協働的探究の促進
    - 個々の学習者の関心に基づく課題設定の支援
3. 理論と実践の統合的展開
    - 研究知見に基づく教育内容の最適化
    - 教育実践からの研究的示唆の抽出
    - 免許・資格取得に向けた体系的な学習支援

Ⅳ. 教育効果の検証と改善

教育実践の効果については、授業評価アンケートや学習者との対話を通じて継続的に検証している。特に、100 名以上の大規模クラスから 30 名程度の少人数クラスまで、多様な学部・専攻の学生が混在する授業環境において、個々の学習者のニーズに応じた教育内容の最適化を図っている。一方で、授業評価からは課題も見えてきている。例えば、学習意欲や基礎学力の差が大きい集団での教育実践において、学習到達度の二極化や、授業規律の維持に要する時間の問題が指摘されている。また、教育的配慮から行う情報提示の調整について、学生との認識の齟齬が生じる場合もある。

これらの課題に対しては、以下のような改善策を実施している：

1. 多様な学力レベルに対応する段階的な学習支援の導入
2. 授業規律に関する明確な基準の提示と、建設的な対話の促進
3. 教育的判断の根拠と目的についての丁寧な説明

また、FD 活動への積極的参加や自己研鑽を通じて、教育方法の革新と改善に努めている。特に、デジタル技術の進展や社会的要請の変化に対応した教育実践の在り方について、常に検討を重ねている。

Ⅴ. 今後の展望

今後は、以下の点をさらに発展させていく所存である：

1. 研究知見の教育実践への更なる還元
2. 学際的アプローチによる教育方法の革新
3. 個々の学習者の発達段階に即した支援体制の確立

これらの取り組みを通じて、教育研究者としての専門性を一層深化させ、学習者の生涯発達を支える教育実践の質的向上を目指していく。

以上

2024 年 3 月 11 日
2024 年度　ティーチングポートフォリオ
社会福祉学部　勝野　愛子

１．教育の理念

本学は、「同朋和敬」の精神を建学の理念としている。また、教育の特徴において、「社会的成功のみを追い求め、勝つために人を退け、人間の尊厳をふみにじっていくものではない。お互いを認め合って切磋琢磨するなかで、自分自身の成功よりも、成長を実感できる場所を作り上げる」とし、幼児・生徒・学生たちと共なるいのちを生きることを重視している。この教育理念は、乳幼児を保育する保育者である「子どもの専門家」を養成し、社会で活躍することを期待するものであり、この理念をもとに授業を展開している。

そのために、入学当初から基礎的・専門的な知識・技能を学ぶだけでなく、その学びをいかに子どもや、他者のために生かしていくか、経験を通して身に付けていくことを念頭に置いている。

２．担当授業の概要

2022 年度
・保育実習Ⅰ-1
・保育実習Ⅱ
・保育実習指導Ⅱ
・保育実習指導Ⅰ- 1
・子ども学総論 B
・子ども学演習Ⅰ-B
・総合演習ⅠE
・総合演習ⅡE
・総合演習ⅢE
・総合演習ⅣE
・保育原理
・保育内容総論 A
・保育内容総論 B
・保育内容「人間関係」の指導法 A
・保育内容「人間関係」の指導法 B
・幼児と人間関係 A
・幼児と人間関係 B

３．教育の方法

現代の学生の特徴とカリキュラム内容を鑑み、アクティブラーニングを中心として授業を行っている。ただ、昨今の学生は、アクティブラーニングの経験が豊富であり、新鮮さを感じていないようであることからも、さらなる、授業の在り方の検討が必要である。

そこで、「人間関係の指導法」の授業では、テキストを用いて学生自身が授業を行うことを取り入れてみた。8 分程度ではあるが、グループに分けて、準備から実践まで 2 コマを使い行った。これまで、テキストを読まなかった学生も、熟読するだけでなく、関連する書籍を探し、読み込むなど、“教える”という行為の大変さに困惑しながらも、わかりやすく伝えるための自分自身の学びの重要性に気づいていた。また、面白さを伝えるための工夫も見られた。

今日の乳幼児を取り巻く現状は、非常に複雑であり、問題も多種多様に存在し、多くの課題がある。その問題・課題には、少子・高齢化、ワンオペ育児、情報化社会における子育て、子どもの貧困、ひとり親家庭、ジェンダー問題など多岐にわたっている。

担当する科目の中での保育所・幼保連携型認定こども園における保育実習では、上記した問題に学生自身が直面することもあり、大学での講義、演習において、基礎的知識を学ぶとともに、実例を用いながら、子ども理解の視点から子どもを「見守る」「援助する」「寄り添う」「関わり合う」「わかり合う」ことを講義・演習で学びを深めている。

例えば、保育の在り方を学ぶ際、テキストや資料等だけでなく、映像資料も用いているが、それだけでは机上での学びのみになるため、実際に保育の場に赴き、子どもとの関わりや、保育者の保育を目の当たりにすることで学生の深い学びにつながるよう留意している。

毎年のことながら、保育に関する授業は、他の授業と内容が重複することもあり、学生は「知っている」と流し聞きしてしまいがちである。実際に理解しているのかを問うために、学んだことを文章にすることを試みている。その内容をグループワークとして、読み合うことで、自分が理解できていなかったことを認識しつつ、自身の学びをさらに深めているようである。

４．学生からの評価と授業改善への努力

2024 年度の授業評価では、概ね、平均以上の評価を得ることができた。実践に基づいた子どもの人間関係を理解できるよう、実践映像を使用して授業を進めてきた。文章や事例だけの説明では、学生もイメージがしづらいこともあったようだが、映像を用いたことで理解が深まったようだ。

集計結果から、授業内容に興味・関心がもてたと回答したものが多かったのは、実践映像を用いたことと、雑談的な保育経験を話していることに関連すると推察する。また、資料は、パワーポイントを使用して、重要な語句は学生に考えてもらい、答えを合わせ、さらに理解しているかをフィードバックしていった。

今後の課題としては、教員の一方的な講義にならないよう、さらなる授業の工夫を考えて

いきたい。

５．今後の教育目標

昨今の学生は、物事を幅広く考える力がある。一方で、その知識はICT（主に、ネット、SNS 等）により得た情報が多いため、物事を深く考える力の乏しさを感じる。この原因の一つとして、本を読むことが少ないのではないか。そのため、本を読む力、理解する力が弱いようにも思える。今後は、学生生活の中で、本に親しむことができる教育を目指したい。読まされるではなく、主体的・意欲的に本を読むことができる講義方法も考えていきたい。

また、アクティブラーニングでの学びが深まる工夫もしていきたい。

具体的には、以下の２点を中心に取り組んでいく。

① 物事を深く考えていくことのできる能力と思慮深さを育てる

授業内外で、学生が興味を持てる本を今以上に紹介していく。学生が読んだ本を他学生に紹介する機会を設け、インプットにとどめることなく、学生自身がアウトプットを行う。

保育に関する本を読み、授業での学びと実習等での経験を紐づけたり、裏付けたりするなどの学修の機会を設ける。

② アクティブラーニングで得た学びを生かす力を育てる

ただ、言われたことをするのではなく、何を学びたいのか、学生自身が目標を明確にする必要がある。そこで、学びたいこと、身につけたいことを学生自身が見つけ出し、そのための方法を考えていく。これまで経験した学び法に留まらず、新たな方法も見つけ出せるような授業方法を取り入れる。

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　専任講師　加藤昭宏

１、教育の理念

本学の建学理念は「同朋和敬」。親鸞の「同朋」精神は、「和」と「敬」という聖徳太子の精神によって実現する。この理念を「共なるいのちを生きる」とも言い表し、お互いの違いを認め合い、敬い、尊重し合える学友との出遇いを大切にしている。

社会福祉専攻では「社会福祉専門職」の養成を目指し、さらに社会貢献をも目指している。本専攻では以下のことに意欲を持って取り組む人を求めている。①「同朋和敬」の精神に立脚し、社会福祉に関する基礎的な知識・技能を学ぶことができる人。②その知識・技能を活用して自ら課題を発見し、その解決に向けて探求することができる人。③それらの成果等を表現するために必要な思考力・判断力等の能力を身につけたいという意欲のある人。

「共なるいのちを生きる」とは、Living Together in Diversity ともいえる。お互いを友として、互いに敬い、尊重し合い、個々の違い、多様性を認め合うことである。これは、我が国が目指す「地域共生社会」の実現の理念に通底している。本理念に則り、地域福祉の推進を図り、「地域共生社会」の実現に向けた「社会福祉専門職」養成に向けた教育を心掛けている。

２、担当授業の概要

社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ
社会福祉演習Ⅲ・Ⅳ
地域福祉の理論と方法Ⅰ
地域福祉の理論と方法Ⅱ
保健医療と福祉
保健医療制度
ソーシャルワーク演習Ⅴ
ソーシャルワーク実習（指導）Ⅰ
ソーシャルワーク実習（指導）Ⅱ
社会福祉基礎演習Ⅰ
社会福祉基礎演習Ⅱ
ソーシャルワーク実習指導（基礎）
福祉行財政と福祉計画

３、教育の方法

理論と実践の往還を意識し、現場実践の事例を適宜取り入れながら講義を展開している。

地域福祉の理論と方法Ⅰでは、社会福祉協議会のコミュニティソーシャルワーカー実践や共同募金を活用した事例について取り上げた。また昨年 1 月の能登半島地震に合わせて、災害ボランティアセンターの取組みなどについても取り上げた。ソーシャルワーク演習等の講義でも同様、様々な現場実践からアセスメントの重要性や地域との協働などの重要性を強調し講義を行っている。

４、学生からの評価と授業改善への努力

「地域福祉の理論と方法Ⅰ」の授業評価について、「この授業の感想」では、「グループワークを中心とした授業で、主体的に学べる授業で楽しかった。」「具体的な事例や例題から学ぶことができ、将来役立つ授業であると感じる。発言する機会が設けられ、自分の考えを評価してもらえる所がいいと思う。」「事例から自分で考えるのが難しい。それだけ専門職としての知識が必要なのだとこの講義で学んだ。」「先生が生徒の意見を拾うように移動しながら授業を展開していて良いなと思いました。自分も他の人の意見などを取り入れたい発問の時もあるのでそのような時に他の人や席の遠い人の意見を先生が拾って共有してくれるのが学びにつながりました。」等の意見があり、現場実践の事例を多く取り入れて話をし、適宜グループ演習を行っていることについて概ね良い評価を受けていると感じた。

また「匿名で質問・意見を受け付けてもらえるのは個人的にありがたいと思いました。」という意見もあり、今後も大人数の講義では継続していきたいと感じている。

一方「今後改善すべき点」については、「もっと良い授業にするための提案」として、「グループワークする際には、同じ人とペアを組むだけではなく、他の人とのペアを作る機会も必要ではないかと考えている。」との意見もあり、ペア分けについては工夫をしたい。

「ソーシャルワーク演習Ⅴ」の授業評価について、「この授業の感想」では、「グループワークや、ロールプレイといった実践に役立つ演習となっており、知識が身につきやすいです。意見を発言しやすい雰囲気と、他者の意見を取り入れ、変化を楽しめる授業内容で、とても楽しいです。」「社会福祉士国家試験にも出る内容も講義の中で出てきたりしてるのでありがたい。」等の意見があり、現場実践の事例を多く取り入れて話をし、適宜グループ演習やロールプレイを行っていることについて概ね良い評価を受けていると感じたため、今後も継続していきたい。

５、今後の教育目標

地域共生社会の実現に向けて、複雑化・複合化した課題を受けとめる包括的な支援体制を構築し、地域住民等が主体的に地域課題を解決していくよう支援ができるソーシャルワーカーの養成が求められている。これらの社会的要請に応答し、深く学び、また社会貢献をもできる学生の教育に向け、現場実践への参画を重視しながら、個別支援と地域支援を一体的に展開し、また児童、障がい者、高齢者等の様々な分野を横断して包括的に支援のできるソーシャルワーカーに求められる知識、技術、価値を学べるようにしていきたい。

2024 年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　専任講師　神谷良恵

１、教育の理念

本学の建学の理念は「同朋和敬」であり、子ども学専攻では互いに敬い合って「共なるいのち」を生きていくという願いをもち、「子どもの育ちと学びを支え、また、子どもをとりまく社会や家庭への支援を行うことのできる、質の高い『子どもの専門家』を養成し、社会に貢献すること」を目指している。特に乳児、幼児に関連する分野において社会貢献可能な人材の養成を目的とし、子どもの専門家としての「知識・理解」、「汎用性技能」、「態度・指向性」、「総合的な学修経験と創造的思考力」を身につけらえるような教育の実践に努めている。神谷の担当科目の多くは保育士の養成に関する科目であり、「同朋和敬」の精神に基づく「互いに敬い尊重し合う」こと、「心と心が通じ合う距離をつくる」こと、「真の幸せを求める」こと、「学ぶとは何かを考えること」を通して共に学び、共に育つことの中に保育士としての資質の基本があると考え、担当授業を実施している。

２、担当授業の概要（2024 年度）

＜子ども学演総論 A＞

大学での学びの方、レポート作成、プレゼンテーション方法・討論の基礎を理解できることを目的としている。学外研修（保育所、幼稚園）や学内の子育て支援（キッズカレッジ）についての実践的な学びを通し、少人数のゼミ内で情報共有と討論を繰り返し、まとめていく力を養う。

＜子ども学演習ＩA＞

前期「子ども学総論 A」に引き続き、ゼミ活動を通してレポートの作成力を高め、プレゼンテーション、討論方法の応用を目的としている。学外研修（福祉施設)、保育体験（保育所）を通して実践的な学びを通し、ゼミ内で学びを共有する。また、研究テーマを設定し、協力して問題解決に向かう中で発表の基礎力を養う。

＜総合演習ＩB＞

子ども学で対象とする子どもや家族、実践方法などの理解を目的としている。地域や市町村の子育て支援に出向き、わらべうたを中心とした実践を通して子どもや子育てについて理解する。また、幼稚園実習に向けた手作り道具を作成、発表することで保育技術を身に付ける。

＜総合演習ⅡB ＞

子ども学の研究対象や方法に関する先行研究について学び、研究テーマについて考察することができるようになることを目的としている。前期に引き続き、主体である子どもと保護者の声に耳を傾け、現代社会に求められる保育のあり方を探るとともに、文献研究を進める。また、幼稚園実習での経験を活かし、キッズカレッジを企画・実践することで更なる親子理解と保育者の役割について学ぶ。

＜総合演習ⅢK＞

研究テーマを確定し、研究の背景に関するまとめ方、研究目的と研究方法の明確化について理

解できるようにすることを目的としている。自己の研究テーマを文献調査だけでなく、子どもの実生活と関連させ、具体物の収集や保育施設への訪問などを通して総合的に探究する。また、討議や発表を通して調査の結果を理論的に整理する力をつけるとともに実践力としてのわらべうたを身に付ける。

＜総合演習ⅣK ＞

研究テーマのまとめ方について学び、科学的な視点で結果について考察することができるようになることを目的としている。これまでに取り組んできた研究テーマを進める中で、ディスカッションや仲間の発表を通して見直すことで、一貫性のある論文に仕上げていく。それにより、今後の人生において自分の伝えたいことを根拠をもって理論的に説明できる力となることを目指す。そしてその力が、自分と周りの人の生活や仕事環境を改善し、円滑な人間関係を築いていく基礎になることを願っている。

＜子どもと生活＞

「子どもと子どもの周りの世界とのつながり」をテーマに、子どもが自らの生活とあそびを通して自分と自分の周りの世界を認識し、適応しようとしていることを理解することを目的としている。授業では、生活やあそびを通して子どもが主体的に社会に適応していくことを踏まえ、保育における具体的な活動内容を学ぶ。その際、学生自身も主体的に各授業のテーマに関連するものを集めたり、意見を出し合ったりすることで、対話的に学びを深める。

＜乳児保育Ⅰ＞

乳児期の特徴と乳児保育のニーズが高まりを捉えながら、保育者としての役割を考えることを目的としている。乳児が意志や思いを持って生きる主体であることを理解するために、テキストだけでなく写真や映像、episode などから多面的に乳児理解を深める。また、日本の伝承であるわらべうたを毎回の授業で体験し、乳児にとって必要なコミュニケーションや接し方について知る。最後に、手作り玩具を手作りすることで、乳児の心身の発達について深く考察する。

＜乳児保育ⅡA＞

「愛されて育つ」ことをテーマに乳児の欲求や要求を知り、一人ひとりの乳児が安心し、安定して過ごすことのできる保育について理解し、考察することを目的としている。子どもは、24 時間の生活の中で周りの人とともに育つことを理解し、家庭と連携して子どもを育む意識をもつ。また、アタッチメントを根拠とする「担当制」、「流れる日課」をロールプレイで体験したり、自分で計画したわらべうたを実践したりすることで、子どもに寄り添った保育スキルを高める。

＜乳児保育ⅡB＞

「乳児保育ⅡA」に同じ。

＜保育方法論＞

予測不可能な時代を生きる子どもの現状を理解し、保育方法のあり方と特徴について学ぶことを目的としている。そのために、テキスト内容やエピソードを読み解くとともに、写真や動画などの映像を通して多面的に子どもを理解し、保育者としての役割を考察する。また、現代社会に特徴的な ICT についても積極的に学び、ICT を取り入れた具体的な保育方法と意義をグループで探求し、その活用について発表する。

＜保育教職実践演習 A＞

幼稚園教諭および保育士としての責任感や使命感ならびに職務内容を理解するとともに、社会性や対人関係能力、幼児理解や学級経営、保育内容等の指導力の向上に取り組めるようになることを目的としている。これまでの理論的、実習を通した実践的学びの集大成として、課題別事例研究にグループで主体的に取り組む。課題別事例研究は、記録のあり方や子どもを主体とした保育方法、日本の伝承を取り入れる意義と具体的方法、保育実技の向上などについて自ら問題提起し、グループ内の調査結果を発表することを繰り返す。その中で 4 月から子どもの専門職に就くプロ意識を高め、社会に貢献する力を培う。

＜保育教職実践演習 B＞

「保育教職実践演習 A」に同じ。

＜保育実習指導Ⅰ－１＞

子どもの実態を知り、適切な指導法・援助法について考察できるようになることを目的としている。授業は演習を中心とし、保育実習の意義・目的、内容を理解し、自らの実習の課題を明確にしていく。事前指導では、実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について理解し、具体的な実習の計画・実践・観察・記録・実習の計画と実践を行う。事後指導においては実習を振り返り意見交換する中で自己課題をさらに深め今後の学びに繋げる。

＜保育実習Ⅰ-1＞

保育実習指導Ⅰ-1 での学びを活かし、保育所や認定こども園で 2 週間の実習を行う。

＜保育実習指導Ⅱ＞

保育実習Ⅱに必要な知識・技能を習得し、保育者として現場で役立つ力を身につけることを目的としている。本授業は演習を中心とする。事前指導では、2 回目の保育所実習における意義と目的を理解し、保育について総合的に理解する。また、これまでの実習や既習の教科目の内容やその関連性を踏まえ、保育の実践力を習得するとともに保育士の専門性と職業倫理について理解する。事後指導では、実習の総括と自己評価を行い、保育に対する課題や認識を明確にする。

＜保育実習Ⅱ＞

保育実習指導Ⅱでの学びを活かし、保育所や認定こども園で 2 週間の実習を行う。

＜保育実習Ⅳ＞

子どもや保護者の内面を理解し、共感の姿勢をもって接することができるようになることを目的としている。個別の支援のあり方を学ぶため、躓きを持った子どもとかかわることを原則とする実習である。一人一人の心に寄り添える資質と集団での適応支援をする実習で、保育園において行う。保育実習Ⅳは、保育実習指導を含み、事前指導、実習、事後指導という一連の流れの中で実施される。

３、教育の方法

現代社会は目まぐるしく変化し続け、スマホ育児、産後うつ、子どもの貧困など子どもを取り巻く社会の環境は日々変化している。そのような社会状況と共働き世帯の増加により、乳児保育のニーズは高まっている。乳児保育Ⅰ・Ⅱでは、ただ乳児を預かればよいのではなく、乳児が意志や思いを持って生きる主体であることを理解し、保育者の役割を考えられるよう理論から学ぶとともに、模擬保育や乳児に適した玩具作りを通して学生が主体的に学べるよう工夫している。。

また、乳児だけでなく、幼児においても予測不可能な時代を生きている現状がある。2023 年度からコロナが 5 類となり、マスクを取っての生活や対面でのコミュニケーションが戻ってきたが、日々進化する ICT に翻弄される世の中で子どもたちは育っている。SNS 等による情報過多は、子育てに対する不安を増幅させたり、大人の使うスマホやタブレットは、子どもの玩具として使われたりする姿が目立つようになっている。これらのことは、親子のコミュニケーション不足や子どもたちの視力低下や運動不足を招く一因になると問題視されている。一方で、生まれた時から ICT が身近にある現代の子どもたちにとっては、ICT とうまく付き合い、メリットを生かして生きていくことも重要である。実際、保育現場では ICT 化が進み、職員の事務仕事や保護者との連絡、情報共有だけでなく、ICT のメリットを利用した子どもたちへの保育方法も普及しつつある。そのため、保育方法論や実習の授業では、子どもに寄り添い、子ども主体の保育を展開できるような保育者の援助や環境設定の重要さを基本としながらも、保育における ICT の現状や活用方法についても講義やグループワーク等で学べるようにしている。

２０２４年度も前年に続き「不適切保育」が社会的問題として報道され、保護者だけでなく、保育者を目指そうとする若者の減少に影響し続けていると考えられる。本来保育は、人生の中で最も成長・発達の著しい時期に、保育者との信頼関係を基盤にした安心と安定の中で、その子自身が伸びようとする方向へと適切に導き、今と将来のその子自身の幸せのために、必要な援助をしていく仕事である。学生たちには、教員の一方的な講義を受けるだけではなく、自らも現代の保育情勢や現代の子育て事情に目を向け、子どもの育ちを捉えるとともに、心を子どもの内面に向け、自分自身が子どもや保護者のために何ができるかを探っていく力をつけてほしいと願っている。そのために、テキストの中で大事なところはどこなのか、何故大事だと思うのかを口頭や文章で表現できる力を身につけられるようにするとともに、意見交換することで多面的な理解ができることを大切にしている。

その他、各授業において、保育形態の種類や特徴、子どもにとって適切な環境の捉え方や保育者としての子どもへの関りなどについて理解や知識を深められるよう、映像、写真、実技体験、グループ討論、模擬保育体験等を取り入れている。

研究論文の作成に関しては、テーマに合わせ、個別指導とゼミ内での発表を繰り返すことで学生の論理的思考が培われるようにした。また、学生本人と相談をしながら本人の感性が十分に発揮でき、本人が納得のいく論文となるよう指導した。

保育実習指導においては、各授業内容と実習指導が互いに関連するよう努めている。そして、年齢による子どもの発達を押さえたうえで、実習において実際の子どもとの関りを通して子ども理解を深め、大学での学びを応用し、保育者になる意識を高められるようにしていくことを目標としている。

さらに、今年度から保育実習Ⅳ（保育心理士）の授業を担当した。石牧教授を主とし、保育現場からの視点を中心に補助に努めた。保育心理士資格取得のための実習においては、生きづらさを抱える子どもの視点に立ち続け、個としての子ども、人としての子どもにじっくりと向き合え、真剣にその子に寄り添ったうえで、その子にとっての課題を探すとともに問題解決のための方法を探っていった。その過程で、学生自身も質の高い保育者として大きな成長を感じた。個を見る視点、人として真剣に向き合う視点を保育所実習の方でも取り入れ、人としての温かな思いが学生自身の原動力となり、成長していけるような教育の在り方を今後も模索したい。

４、学生からの評価と授業改善への努力

これまでの学生からの評価結果においては、どの授業においてもほとんどの項目で 4 以上の評価があったため、おおよそ学生にとって納得のいく授業ができたのではないかと思う。今後も学生の保育技術と知識に貢献できるような授業展開をしたい。

保育実習においては、かねてより記録の負担を軽減したいと考えていた。2024 年度は、具体的な改善案を実習先に提示し、理解を得ることで学生の睡眠時間を確保し、過労を防ぐように努めた。4 年生については実習後、使い方を調査したところ、記録を簡略化できたことで書きやすく、時間がかからず、睡眠時間もしっかり確保できたととの意見が多かった。また、視点を絞り、具体的なねらいを明確に持つことでかえって一日を事細かに書くより、子どもや保育内容について深く観察、考察できた上に、対象時間以外を緊張せず思い切り子どもと関わることができたとの意見を多く得られた。今後、学生からの記録についての希望や意見も取り入れ、記録冊子の改善に取り組む。

５、今後の教育目標

(1) 学生主体の授業

学ぶことに目的を持ち、学ぶことが「面白い」と意欲的に自ら調べ、文章としてまとめていく力をつけられること。また、それが学生自身の喜びとなること。

(2) 専門知識の習得

子どもの発達の理解、心や状況を理解し、実習を通して臨機応変に適応できるための知識の習得に繋がるようにすること。

(3) 専門技術の習得

保育者として絵本、歌、わらべうた、ペープサート、運動あそびなど保育表現のレパートリーを増やし、実習で実践し保育技術を高められるようになること。また、子どもが自発的なあそびを通して学べるような環境構成を作れるようになること。

(4) 社会人としてのコミュニケーションスキル

目の前の人を尊重する基本的態度、相手の意見を傾聴し、自己の意見との調整を図ることができるようになること。

(5) 自己肯定感と生きがいを持った将来設計

他者と自分の違いを認め、自分の意見や人となりに少しずつ自信を持てるようになること。そして、自分自身を認め、大切にする中で自分のやりたいことに向かって、具体的なイメージをもって前向きに将来の人生設計を考えられるようになること。そして、学生の一人一人が今と未来を自分自身で創っていることを自覚し、今と未来を幸福に生きてほしい。

以上

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　教授　鴨澤　あかね

１、教育の理念

本学の建学の理念「同朋和敬」の「同朋」は、親鸞が、浄土真宗の教えを聞いてくれる仲間を、弟子ではなく、御同朋・御同行（おんどうぼう・おんどうぎょう）と呼んだことに由来し、師弟関係ではなく、共に教えを聞き、学ぶ仲間である、という意味を持つ。そしてこの「同朋」の関係が、本当の意味で成り立つためには、「和敬」の精神、すなわち、単に「和」をもって皆が同じになるのではなく、「敬」の心でもって互いの異なりを認め合い、尊重しあうことが必要である。

私はこの建学の理念に立脚し、「先生」と呼ばれて奢り高ぶることなく、学生は教員を、「先生」と呼んで依存し、学生として果たすべき責任を果たさない、ということなく、自主的、能動的に学ぶ姿勢を身に付けていける学びの環境を整備し、学生と関わっていくことを自らの信条とする。そして教員と学生、学友同士が互いの違いを認め合い、敬い、尊敬しあいながら、学び、育っていきたい。

私が所属する社会福祉学部 社会福祉学科 心理学専攻では、「社会福祉学」と「心理学」の知識・技術を学ぶことで、相手の話に耳を傾け理解する力を身につけ、幅広い分野で活躍できる人材になることを目指している。また心理学という、人の心や行動を科学的に探究する学びは、自己理解や他者理解を深め、自己成長や対人能力の向上につながるため、卒業後、公認心理師などの心理学的な支援の専門職につく場合だけでなく、一般企業をはじめ、様々な領域で役立ち、活かすことが可能である。

それらを鑑み、専門資格取得に偏らず、心理学的な視点を、柔軟に幅広く活用し、「同朋和敬」の理念に則って、他者とともに人生を豊に生きることのできる人材を育成することが教育の目的である。

２、担当授業の概要

１）学部

心理学基礎演習Ⅰ・Ⅱ

社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ

心理学的支援法

心理演習Ⅰ・Ⅱ

心理実習

２）大学院

心理学基礎研究

心理学研究法特論

心理実践実習
臨床心理基礎実習Ⅰ・Ⅱ
心理療法特論
臨床心理学特論Ⅰ
臨床心理査定演習Ⅱ
臨床心理面接特論Ⅱ

３、教育の方法

大学教育全般において私が重視していることは、学生の主体的・能動的な学びの環境を作ることである。高校までの教育は、基本的な知識と教養を身に付けることに重点が置かれ、暗記主体の受動的な学習体験にならざるを得ない面も多々あると思われる。それが大学に入っても尚、教員に教えてもらうのが当然であるとし、自身で考えたり、様々な理論や現象を、好奇心を持って良い意味で疑ってかかる姿勢で能動的に学習することはそれほど容易ではないように見受けられる。そのため、学ぶことの楽しさ、同朋和敬の理念に則って、互いの違いを認め合い、敬い、尊敬しあいながら成長する喜びを、学生にはぜひ体験してもらいたい。

その一例として「心理学的支援法」の授業では、受講学生は毎回、5、6 名の小グループにわかれてディスカッションを行い、それを全体に発表してさらにディスカッションするという方法を取り入れている。この授業は心理学的な支援がどのような理論に基づき、どのような場で実践されているか、といったことを学ぶ授業であるが、各回のテーマに関する知識は、最低限必要な内容を教員が資料として配るにとどめ、その資料に基づいて教員が設定したディスカッション事項を小グループで討論し、互いに意見を出し合い、他者の意見をきいて考えることを重視している。

多くの場合、心理学の問い、たとえば「なぜ生まれてきたのか」「どうやったら自分らしく生きられるか」などは、明確な答えがなく、しかしそのわからなさに持ちこたえ、考え、悩む能力が求められている。そういった力を培いうためにも、アクティブラーニングを積極的に授業では取り入れている。

４、学生からの評価と授業改善への努力

2024 年度の学生からの授業評価アンケートは、1 項目に 1 つ 2 があったことを除き、すべて 3 以上の評価で、5 の評価が一番多かった。1 名のみ回答のあった 2（そう思わない）の項目は「教員は、適正な範囲内で私語や居眠りを注意する」というものであったが、評価をうけた授業である「心理学的支援法」は、資料の音読とグループディスカッションで構成されており、私語をする学生はなく、居眠りもまれにしかみられないため、特に教員の介入の必要がなかったことが回答に関与している可能性がある。これらから概ね学生が満足する授業ができているものと考える。上記 3 に記載したディスカッションに関し、授

業評価の自由記述で「自分達で議論し合うことで様々な意見を聞くことができる」「新たな知識の吸収に繋がっている」「様々な考え方が行き交うのでとても学びになる」などの意見をいただいた。

５、今後の教育目標

2024 年度から、これまでの社会福祉学科社会福祉専攻心理学コースは、心理学専攻として独立し、入学時より心理学を学びたい学生を受け入れるようになった。学問の専門分野としての心理学と、入学学生が抱く心理学のイメージは、必ずしも同じではないことが多々ある、というのが私の経験からの推測である。それに関して、専門分野としての心理学の正しい知識を持って、学生のイメージの修正を試みるよりも、まずは、心理学の学びに学生が何を期待し、どのようなイメージもっているのかをしっかり聞き取り、理解したい。そのことを起点として、学生が好奇心をもって、専門的な学びに取り組み展開していけるよう、教員との対話、学生同士の対話を重視した教育を展開していく。そして同朋和敬の理念を体現するような人材を育成していくことを目標とする。

また、公認心理師や臨床心理士という心理学的支援を行う専門家の養成という即面においても、人によりそって支援できるような人材の育成をめざすとともに、国家試験等の合格率向上にむけて、確実に必要な専門知識が修得できるよう、授業における理解度確認テスト、模擬試験などを実施してサポートしていく。

２０２４年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　准教授　川乗賀也

１、教育の理念

本学の建学の理念は「同朋和敬」です。 親鸞の「同朋」精神は、「 和」と「敬」という聖徳太子の精神によって実現するとある。この理念を「共なるいのちを生きる」とも言い表し、 お互いの違いを認め合い、敬い、 尊重し合える学友との出遇いを大切にしている。そのなかで精神保健福祉士養成課程は、心の病気や障害をもつ人々に対する社会復帰・社会参加支援の取り組みの実現のために「高度な専門知識を身につけて、社会の要請に対応できる医療、福祉、司法、教育などの分野で活躍できる精神保健福祉士の養成をめざす」としている。私の講義では上記の理念に則り、当事者を理解するため疾病だけを見るのではなく、「1人の人間として、当事者を理解すること」、「疾病予防のために社会の側面からのハイリスク群へのアプローチ」を意識している。これらの学びを通してお互いの違いを認め合い、敬い、尊重しあえる人々との出遇いを大切にした上で、心の病気の軽症化や予防を意識できる人材を養成することを目標としている。

２、担当の授業の概要

精神保健学Ⅰ
精神保健学Ⅱ
精神保健福祉援助実習指導Ⅰ
精神保健福祉援助実習指導（基礎）
精神保健福祉援助実習指導Ⅱ
精神保健福祉援助実習指導Ⅲ
精神保健福祉援助実習Ⅰ
精神保健福祉援助実習Ⅱ
精神保健福祉援助実習Ⅲ
精神保健福祉相談援助の基盤（専門）
精神保健福祉援助演習Ⅱ
精神保健福祉の原理Ⅰ
精神保健福祉の原理Ⅱ
社会福祉演習Ⅲ
社会福祉演習Ⅳ
精神疾患とその治療Ⅰ
精神疾患とその治療Ⅱ
精神医学研究

生活と福祉

３、教育の方法

講義科目では、精神保健福祉士として精神科病院・障害福祉サービス事業所で勤務してきた私の経験を踏まえたうえで講義している。また、現場ではたらく精神保健福祉士や、近年採用が進んでいる保護観察所の社会復帰調整官等をゲスト講師として迎え、可能な限り座学と実践を結びつけられるように工夫した。また、精神疾患をわずらっている当事者にもゲストとして講義に参加してもらい学生に実際の当事者の思いや生活をイメージできる機会を設けた。

さらに、学習効果を高めるために定期的に復習のプリントの配布をおこなっている。講義ではテキストを中心に進めているので復習プリントを配布することで自主的にテキストを開いて学修する機会となっている。また、学生自身の感じたことを文章化するリアクションペーパーの配布を実施した。

演習においては、精神保健福祉士として必要な態度・価値を理解することは勿論のこと、演習を通じて傾聴やアセスメントの模擬実践等をおこなった。その過程で学生自ら、1、問いを立てる、2，調べる、3，まとめる、4，発表する、という 4 つの流れを学ぶことができた。

実習指導・実習においては、配属される実習先の理解のみならず連携すると思われる関連施設についても調べて 1 人の当事者を支援するために援助が展開されているのか包括的に理解する。また実習後も学生自身が当事者とのコミュニケーションにおいて、どのように感じ、どのように会話を展開したかを振り返ることで学生自身が考え方の自己覚知ができ、今後の課題をみつけられるよう指導している。

４、学生からの評価と授業改善への努力

授業評価アンケートでは、おおむね良好な評価が得られたと思われる。今後においてもこれまでの内容を踏襲したいと考えているが、少人数のクラスでは積極的な問題の投げかけによるコミュニケーション、大きめのクラスでは自身の考えを検討するためのワークの時間を設けてみたいと思う。

またパワーポイントを使った資料を配布しているが、講義後に見直しても理解できるよう文字数を多くしている。過去のアンケートで文字が多く見ずらいという指摘があったので、タブレット・PC を持ち込み可にして TEAMS でも資料を見らえるようにしたところ同様のコメントはなくなった。

５、今後の教育目標

精神保健福祉の領域は時代とともに新たな社会的な課題があらわれ、精神保健福祉士が活動する領域も範囲が広がった。しかし、根本にあるのは精神障害者の社会復帰・生活支援

であると思われる。今後の教育においても根本となる支援を中心としつつ時代と共に精神保健福祉士に求められる福祉的ニーズについて触れていきたい。

また、可能な限り座学だけではなく現場で活動する精神保健福祉士をゲスト講師として招き学生が少しでも実際の支援をイメージできるようにしたい。その上で支援者ばかりの視点だけではなく、ピアサポーター派遣事業等を利用して精神障害者についてもゲスト講師として招き、当事者ニーズや支援者に求めるものについて考えられる時間を作っていきたいと思う。最終的には、これらの実践的な学びが国家試験に向けた勉強の動機づけになるようにしたい。

2024 年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　北島　信子

１、教育の理念

本学の教職課程では、親鸞聖人の「同朋」と聖徳太子の「和敬」をもって「共なるいのち」を生きるという教育理念と全く軌を一にされている。「自らのいのち（存在）と向き合うことで一人ひとりのいのち（存在）と出会い、そこから真実の道を求め、開いていく教師」の養成が本学教員養成の理念であり、以下の目的に重点を置きながら、全学的な協力・指導体制をもってこの理念に取り組み、「共なるいのちを生きる次世代の教育者」を養成するとされている。その目的とは、「１、人類文化及び社会福祉に貢献する確かな教育力の育成」「２、社会性を持ち、広く豊かな教養に支えられた実践的指導力の養成」「３、一人ひとりのいのち（存在）と出会い、そこから真実の道を求め開いていく自己教育力の獲得」である。とりわけ北島の担当科目は、教職課程の「幼稚園一種」に位置づいており、本学の教育理念、教職課程の教育理念と同じ方向性で教育理念をもって授業運営を行っている。また、2024 年度から本学中高免許の教職課程科目「教育方法論」「教育課程論」も担当している。

２、担当授業の概要

総合演習ⅠJ
総合演習ⅡJ
総合演習ⅢJ
総合演習ⅣJ
【教職科目】幼児と環境 A
【教職科目】幼児と環境 B
【教職科目】保育内容「環境」の指導法 A
【教職科目】保育内容「環境」の指導法 B
【教職科目】幼児教育原理
【教職科目】幼児教育実習指導 1
【教職科目】幼児教育実習指導 2
【教職科目】幼児教育実習Ⅰ
【教職科目】幼児教育実習Ⅱ
【教職科目】特別活動の指導法
【教職科目】教育方法論
【教職科目】教育課程論
保育学研究（院）（履修者なし）
比較保育学研究（院）（履修者なし）

３、教育の方法

現行学習指導要領および幼稚園教育要領において、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、カリキュラム・マネジメントをとおして教育課程の改善、教育活動の質の向上の実現が目指されている。とりわけ幼稚園教育要領においては、「幼稚園教育において育みたい資質・能力の明確化、小学校教育との円滑な接続、現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直し」が求められている。幼稚園教諭免許状に関わる科目については、理論はもちろんのこと、喫緊の実践課題を取り入れ、学生にとって理論と実践が結びつくものであることを意識して講義した。

担当するすべての教職課程の授業科目において、１～４年生の各授業で履修段階に応じた今日的な幼児教育、中等教育の基礎理解、保育では領域及び保育内容の指導法、実践を探究してきた。基礎理論から応用的な理論に至るまで、常に指導法や実践を考えながら授業展開をした。学生が主体的に取り組めるよう、知識・技能の習得だけでなく、可能な限り討議発表も取り入れた協働的な学びも意識して実践した。

すべての授業において、受講生とレポートの往還（毎回の振り返りを記述する「大福帳」）をし、学生が毎回の出席状況・学修履歴を確認できることにより、学生の主体的な学修姿勢の確立、学生自身の学びの振り返りの一助となっていると考える。

４、学生からの評価と授業改善への努力

2024 年度後期の「幼児教育原理」の学生による授業評価アンケートでは、授業の目的・内容、学生の授業への参加状況、教員の授業方法や態度、環境、学習の達成度・授業への満足度について、おおむね全体の平均値を上回る回答値であったが、より学生がコミュニケーション（学生間も含め）取りやすいよう、授業設計をしていこうと考える。中高免許課程の授業においても、学生による授業評価アンケートでも同様の結果があった。意欲的な学生が多く、これからも学生の意欲に応えられるような授業準備をし、課題を提示していく。

５、今後の教育目標

担当している科目の大部分が教職課程の科目ということもあるため、本学の３ポリシーと教職課程のめざす方向性との接合点を探り、個々の授業科目で実践に努めていきたい。学生が幼児教育、中等教育の基礎的な理論から学び、実践や応用的な理論が理解できるよう、「同朋和敬」の理念とともに自己研鑽に励みたい。幼稚園教諭・保育教諭・保育者・中高教諭として活躍していく学生たちが、「共なるいのち」としての乳幼児・生徒から学び、自身の子ども観、教育観、教材観を深く育てていきたい。

こうした教育理念と具体的な教職課程の学修内容の相互関係性を探り、教員養成・保育者養成に努めていくことが前年度に引き続き教育目標である。

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　教授　工藤隆治

1. 教育の理念

本学では、「同朋和敬」を建学の精神としている。親鸞がしました、「同朋」は、聖徳太子が表した、「和」と「敬」によって実現する。この理念は、「共なるいのちを生きる」を表している。そして、「御同朋御同行」の考え方は、福祉社会の基盤となる福祉社会に通じる概念である。担当科目は、本学の建学の精神を踏まえて、社会福祉学を基礎とした社会貢献ができる人材を育成することを目的としている。

具体的には、「社会福祉専門職に必要とされる教養、福祉基礎実践力」、「利用者とその家族への支援」、「他職種との連携に係わる福祉実践力」、「社会福祉実践分野等で成長していく主体的な態度」、「同朋和敬を基盤とした人間力」、「社会福祉に関する総合的な学術経験に伴う創造的思考力」の習得を目指している。

担当科目については、社会福祉の理論、政策、歴史の学習を踏まえて、社会福祉専門職としての教養や知識、技術の習得と学生の主体的な学習態度の育成を目指した授業展開を実施している。

2. 担当授業の概要

【前期】

大　学

社会福祉発達史Ⅰ（西洋）　13名

ソーシャルワーク実習指導ⅠL　4名

社会福祉演習ⅠL　5名

社会福祉演習ⅢE　1名

ソーシャルワーク演習ⅢG　18名

社会福祉総論Ⅰ　3名

社会福祉の原理と政策Ⅰ　88名

【後期】

ソーシャルワーク演習VD　15名

ソーシャルワーク実習指導ⅠL　4名

社会福祉演習ⅡL　5名

社会福祉演習ⅣE　1名

ソーシャルワーク演習ⅣG　19名

社会福祉総論Ⅱ　2名

社会福祉の原理と政策Ⅱ　94名

【通年】
ソーシャルワーク実習ＩＬ　４名

大学院
【前期】
社会福祉政策論研究　０名
【後期】
地域福祉研究　１名

3. 教育の方法

講義では、各授業において、目的を明確にし、それに基づき、社会福祉の専門用語や事実に対して、因果関係や論理性を踏まえた授業を展開している。講義の方法としては、テキストを中心に、補足資料を配付し、パワー・ポイントや板書を工夫して、学生の理解を促している。各講義の終了後には、学習したこと、質問、感想をレポート登録の機能で、学生に記述をさせている。学生の質問や感想などについては、次回の講義のなかで返答し、学生の理解度を確認している。また、15 回の講義のうち、2 回、授業時間内に小レポートを実施している。小レポートを学生に課すことによって、論理的思考を育成し、主体的な考えを確立させている。

ソーシャルワークの演習は、学年と実習前・後で、次のように展開している。3 年の前期の実習前の演習では、各学生に個別の利用者の事例を報告させ、重要なポイントに対して意見を交換し、実習における実践的な授業を展開した。そして、ソーシャルワーカーの現場での実践を DVD で確認し、実習における社会福祉士の役割を確認した。3 年の後期の演習では、地域福祉にかかわる事例を発表させ、その内容をもとに意見を交換し、ポイントを整理させた。そして、地域福祉にかかわるソーシャルワーカーの実践を DVD で確認した。4 年生の前期では、各学生に実習中に経験した事例を発表させ、それを基に、質疑応答などで事例の検討を行い、社会福祉士の専門性、ソーシャルワークの視点を検証し、実習の総括を行った。事例発表の時は、個人情報の扱いに注意するよう指導した。

ソーシャルワークの実習指導では、実習前と実習後で次のような授業を展開した。3 年生前期の実習前の実習指導では、実習における 3 つの課題を設定させ、それを実現させるための方法を記述させることにより、主体的に実習で学ぶことを深化できるような授業を実施した。3 年生の後期では、ソーシャルワーク実習Ｉの振り返りを行い、4 年生前期に行われるソーシャルワーク実習IIの各学生の課題について確認した。

ソーシャルワーク実習では、大学での演習、実習指導で学習したことを実践できているかを、施設における実習指導担当者とともに確認をした。

演習、実習指導後、授業において学んだこと、質問、感想の整理を行い、学習の内容を確認した。以上、演習、実習指導、実習では、アクティブ・ラーニングを意識しながら、授業

の展開をし、学生が主体的に授業に参加できるように工夫をした。

4. 学生からの授業評価と授業改善への努力

学生の授業評価を確認すると、おおむね全体的な満足度は、合格ラインの数値を示していたが、いくつかの課題が示されていた。大教室の講義では、授業の興味や満足度、コミュニケーションの項目で若干評価が低かったように思える。演習では、教材における音響・視覚機器について課題があった。

学生からの授業評価に鑑み、講義では、学生からの質問、授業の感想などについて、次の授業時間で、確実に回答し、コメントを示すことを、今まで以上に意識していきたい。また、社会福祉に関わる話題を授業に取り入れ、学生に興味を思ってもらえるよう努力をしていきたい。演習では、学習の目標・目的を明確にし、演習の展開過程と授業計画の改善を行っていきたい。

5. 今後の教育目標

担当科目において、講義科目は、カリキュラムのうえで、社会福祉の基盤に位置づけられている。演習、実習指導は、ソーシャルワーク実習につながる科目である。実習では、社会福祉士の専門性に関わる講義、演習、実習指導で学習した成果を社会福祉施設で実践する科目である。

講義科目は、社会福祉の理論、歴史、政策などの社会福祉の基本的知識を習得することを目的としている。社会福祉の歴史の起点や通史を学習したうえで、現在の課題や状況を踏まえて理論の追究をする。そして、社会福祉の歴史と理論を基盤に、未来における政策の体系を考えることができる授業を展開することを目指す。

担当科目では、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士などの国家試験受験を希望している学生が受講している。担当科目に関する国家試験問題の傾向と対策として、過去に出題された問題を教育内容に含める。

演習、実習指導では、利用者理解、自己覚知を各学生間との関係性を含めたワークで理解させるとともに、事例に対する個別支援計画を作成させる。

実習前・後の演習では、ソーシャルワーカーの社会福祉関連の施設、機関での実践を DVD を視聴することのより、各学生に確認させる。

実習前の実習指導では、個別支援計画の作成、利用者理解、自己覚知の確認を課題とし、それを達成させるための方法を明確にする。

実習では、実習指導担当者と連携をして、施設における利用者との関係から、演習、実習指導の内容を実践し、ソーシャルワークの本質を学習させる。

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　教授　汲田千賀子

１．教育の理念

社会福祉学部社会福祉学科社会福祉専攻では、全ての人が生き生きと過ごし、人間らしい暮らしができるようにするにはどうしたらよいのかという課題に向き合い、社会福祉の制度・政策のみならず教育・医療などを体系的に学びながら、広い視野で多様な今日的課題にアプローチしていく。そのため、高度な専門知識や技術だけでなく、豊かな人間性とともに人の痛み・苦しみ・つらさ・喜びを共感できる能力を身につけることが大切とした教育を行っている。

担当する科目においては、社会福祉士国家試験受験資格の取得にかかるものが多く、講義、演習、実習科目と幅広いため、大学での学びと実習科目との連動を意識しながら展開していくようにしている。卒業時に学生が習得している能力としては、①社会福祉専門職に求められる教養が身についている、②社会福祉専門職に必要な福祉実践基礎力を修得している、③社会福祉専門職に必要なコミュニケーション能力を備えていて、クライエントやその家族のみならず、他職種や関係機関とも適切にかかわることができる、④社会生活を送るうえで何らかの生活課題に直面しているクライエントやその家族と向き合い、様々な分野の人と協働・連携することによって課題解決をはかることのできる福祉実践力修得している、⑤社会福祉実践に対する責任と情熱をもち、実践分野にかかわらず生涯学び続け、成長しようという意欲を持っている、⑥「同朋和敬」の精神を理解し、他人の痛みがわかり、ともに生きがいのある社会を目指した豊かな人間性を体得している、⑦社会福祉専門職として教養と専門知識・技術を身につけていて、それらを生活上の課題を抱えているクライエントへの支援に総合的・創造的に活用できる、という7項目を掲げている。

２．担当授業の概要

社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ
社会福祉演習Ⅲ・Ⅳ
生活と福祉（オムニバス）
高齢者福祉論
介護福祉
ソーシャルワーク演習Ⅰ・Ⅱ
ソーシャルワーク実習指導（基礎）
ソーシャルワーク実習指導Ⅰ・Ⅱ
ソーシャルワーク実習
卒業論文指導
スーパービジョン研究（院）
福祉・心理総合支援演習（院）
福祉研究法（院）

特殊演習Ⅰ～Ⅳ（院）

３．教育の方法

今日の社会福祉の支援を必要としている人たちの状況を鑑みると、領域や分野を横断し、なおかつ包括的なアプローチが求められている。担当する講義科目の介護福祉や高齢者福祉論では対象にフォーカスするだけでなく、そのことが起こる社会的背景や環境についても考えられるよう関連する話題に触れながら授業を展開している。さらに、ジェネラリストソーシャルワークの視点を意識できるように、具体的事例を用いながら高齢者という対象をコミュニティソーシャルワークという視点で支援することなども学べるように努めている。

介護福祉では、倫理観、法律、規定などを基本的なことを学んだうえで、最新の研究による考え方や、ＩＴを用いた介護の方法、海外の動向など視野を広げ、創造的な仕事ができる専門職となるよう、映像教材や新聞記事、担当教員の研究結果などを用いながら教授している。

各種演習では、考える力、書く力、他者と協働する力を養うために、個人で考えること、それをまとめて人に伝えること、さらに意見をまとめること、討論を行っている。社会福祉演習では、所属している学生全員が卒業論文を執筆することを目標に掲げ指導している。今年度も 12 名のゼミ生全員が卒業論文を提出し単位を修得した。

４．学生からの評価と授業改善への努力

2024 年前期の授業評価アンケートでは、「高齢者福祉」の科目、「介護福祉」の科目では、おおよそすべての項目で講義の平均値以上、あるいは 4.0 以上の値であった。また、演習科目においても同様の結果だった。一方で、学生からのコメントの収集およびフィードバックについては弱いと思うため、次年度以降は強化していきたいと考えている。具体的にはリアクションペーパーで授業への質問や所感をもらい、翌週にそれに対応することを大講義でも展開していきたい。

５．今後の教育目標

社会福祉の学習は、各科目のつながりや連続性が重要であると考えている。そのため、演習科目ではその連続性を重視しながら授業を組み立てていきたい。また、今社会の中で何が起こっていて、その結果、福祉業界あるいは、福祉を必要としている人がどのような立場に置かれているのかなど、「今」を伝えていくことも大切であると考えている。

ゼミ学生をはじめとしてアドバイザーとしては、国家試験受験資格の取得を希望する学生へのフォローやコミュニケーションを大切にしながら、学生が納得のいく学生生活を送れるよう教育という観点からサポートしていきたい。

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　下山　久之

１、教育の理念

同朋学園の建学の精神「同朋和敬」の考え方に基づき、様々な背景を持つ人々が共に生きることを目指す社会的包摂（ソーシャルインクルージョン）を教育の理念としている。違いを認め合い、共に生きるということを実現するには、どのような配慮が必要であるのかを、実際の大学での教育を通しそれぞれの学生に考えてもらうことを目指している。

２、担当授業の概要

「社会学」と「社会理論と社会システム」では、差別が生じてくる背景、文化的性差の考え方、国境を越えて人々が移動する今日の状況を踏まえ、グローバル社会化は単純に国境がなくなることを意味するものではなく、むしろ国境をめぐる衝突が増えてくることやヘイトスピーチを初めとする社会的排除（ソーシャルエクスクルージョン）が増大しやすいことについて解説を行った。

「認知症の理解」では、認知機能の低下により生活障害を来し、それ故に社会的な隔離や差別を受けやすい状況に置かれる記憶障害を抱えた人々の状況を理解することを目的とし、授業を行った。どのような配慮があれば、社会的排除ではなく、社会的包摂に至るのかの道筋を考えることを目的に授業を展開した。

３、教育の方法

講義を中心とするが、毎回、その授業の復習と次回の授業の予習を課し、特に復習の内容から授業をどのように理解しているのかを把握した。「認知症の理解」では、映像教材を活用し、実際の認知症の人の姿を目にすることにより、具体的にイメージを持てるように配慮した。

４、学生からの評価と授業改善への努力

「認知症の理解１・２」では 5 階の大教室で授業を行ったため、やや授業内容が聞き取りにくい学生が存在した。「社会理論と社会システム」では聴覚障害のある学生と視覚障害のある学生等、合理的配慮を必要とする学生が受講しているため、それぞれの学生の声を聞き、その要望に応えるように配慮した。

５、今後の教育目標

実際の授業を通し、多様な学生が授業に参加できるように「社会的包摂」を意識し、授業を行っていきたい。

2024 年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　都築　治彦

１．教育の理念

社会福祉学部社会福祉専攻では,「同朋和敬」の精神に立脚し、社会福祉に関する基礎的な知識・技能を学び，その知識・技能を活用して自ら課題を発見し、その解決に向けて，必要な思考力・判断力等の能力を身につける学生を養成することを目的としている．そのため，分野ごとに，社会福祉・教育・経済情報行政・心理・こども学の専攻やコースに分かれ，それぞれの専門性を地域社会に貢献可能な人間を養成することを目的としている．私の場合は経済学担当として，社会福祉に関連する経済学的側面について理解できる学生を養成するのが目的である．

２．担当授業の概要

経済学概論，経済学各論，経済政策Ⅰ，経済政策Ⅱ，社会統計学入門，情報処理，などの経済系科目を主に科目を担当している．3，4 年のゼミは担当していない．

前期

経済学概論　108 名

経済政策Ⅰ　9 名

社会統計学入門 A　8 名

情報処理 C 25 名

社会福祉基礎演習ＩＪ16 名

後期

経済学各論　107 名

経済政策Ⅱ　18 名

社会福祉調査の基礎（含む社会調査の基礎）　120 名

社会統計学入門 B　10 名

社会福祉基礎演習ⅡＪ16 名

３．教育の方法

経済学概論に関しては，経済学の初学者ということで，ミクロ経済学，マクロ経済学の最も基礎的な部分に関して易しく理解できるように講義することを心掛けた．基礎知識を前提とせず，初歩的な経済学を理解してもらうよう努めた．

経済政策Ｉに関しては，財政政策について講義した．理論的および現実的な日本財政の実情について講義した．

社会統計学入門 A については，統計学の初歩について講義した．統計学の講義には数学が必修だが，なるべく数学を使わないよう工夫した．

情報処理 C については，Office の word，excel，powerpoint の利用方法について講義した．

経済学各論は，経済学概論の後編として，ミクロ経済学，マクロ経済学の基礎からの展開について講義した．

経済政策Ⅱについては，金融政策について，現実社会での金融の役割から理論的な金融政策について講義した．

社会福祉調査の基礎（社会調査の基礎）は，国家試験に対応する科目であることを考慮して講義した．社会福祉調査の方法について基本的な知識をテキストに沿って講義した．

社会福祉基礎演習Ⅰ・Ⅱは 1 年生の演習科目で，共通のシラバスに沿って講義を進めた．前期は大学生活に慣れること，後期は全員で課題についてレポートを作成することに努めた．

４．学生からの評価と授業改善への努力

学生からの評価は，全体的にはおおむね良好な結果を得られた．経済学を真剣に学びたいという学生は非常に多く，経済学概論および経済学各論は 100 名を超える履修者を数えた．今回は初の開講ということで，学生にとっての需要に合ったものかは不明だが，経済学部で教えられている経済学に触れられたということは意義があったものと思われる．経済政策Ⅰ，Ⅱについては受講者が少なく，財政学や金融論の知識を多くの学生に修得してもらいたい，と思われた．社会統計学入門も同様に思われた．講義中の学生の態度については，比較的良好であった．

５．今後の教育目標

経済学概論，および経済学各論については，理論的な講義だけでなく，現実に起こっている経済的事象に対する解説を織り交ぜていきたいと考えている．経済政策Ⅰ，Ⅱについては，財政と金融という経済学の 2 つの柱であり，経済学部の学生に引けを取らないような知識を修得してもらうようにする．統計学については，講義のみでなく演習も含めていきたいと考えている．3 年ゼミについては，公務員試験対策や学生の関心事項などを考慮して講義を進めたいと考えている．

以上

2024年度教員ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　社会福祉学科
心理学コース・心理学専攻
人間学研究科　仏教人間学専攻
臨床心理分野
准教授　福島　裕人

1. 教育の理念

本学の社会福祉学部社会福祉学科社会福祉専攻の心理学コース（2024年4月より心理学専攻新規開設）では、心理学の基礎と応用、カウンセリングの理論と技術、ならびに子ども、障害児・者、高齢者、精神障害者やその家族への心理的援助の基本姿勢である「傾聴」の技能と実践力を身につけ、公認心理 師国家試験受験資格の取得を目指している。公認心理師の業務として、①心理に関する支援を要する者の心理状態を観察しその結果を分析すること、②心理に関する支援を要する者に対し、その心理に関する相談に応じ、助言、指導、その他の援助を行うこと、③心理に関する支援を要する者の関係者に対し、その相談に応じ、助言、指導その他の援助を行うこと、④心の健康に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供を行うこと、の4 つが挙げられている。筆者の担当科目はすべて心理学コース（心理学専攻）・大学院臨床心理分野科目であり、上記①～④を実践できる人材の育成を念頭に置き、担当授業を実施している。

2. 担当授業の概要

＜学部科目＞
心理学基礎演習Ⅰ・Ⅱ
公認心理師の職責
社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ
心理実習（実習訪問指導含む）
＜大学院科目＞
臨床心理面接特論Ⅰ
臨床心理学特論Ⅱ
臨床心理基礎実習Ⅰ／心理実践実習（実習訪問指導含む）
臨床心理基礎実習Ⅱ／心理実践実習（実習訪問指導含む）
人格心理学特論
心理学特殊演習Ⅰ（M1ゼミ，含修士論文指導）
心理学特殊演習Ⅱ（M2ゼミ，含修士論文指導）
臨床心理学研究法特論

心の健康教育に関する理論と実践
福祉・心理総合支援演習

3. 教育の方法

2023 年度に着任して以来，学部及び大学院のいずれにおいても心理臨床実践知の還元を念頭に取り組んだ。また 2024 年度は心理学専攻開設に伴い 66 名の入学生を迎えることができた。学部授業においては社会人基礎力の養成を念頭に実施した。心理学基礎演習 1・II（1 年生ゼミ）では課題解決学習を取り入れ，学生がチームワークを大切にしながら主体的に取り組めるよう工夫した。また座学中心科目においては動画資料や外部講師招聘などを活用し，実際の臨床現場における公認心理師・臨床心理士の業務をリアルに理解し，学生が興味を持って積極的に学ぶことができるよう工夫した。さらに大学院授業においては専門家養成のための更なる実践的知の提供及び教授を心がけた。大学院での指導においてはそれぞれの講義以外に，学内外における実習指導が肝要となる。学内実習でのケース（心理面接や心理検査）陪席及びケース担当の際には，各回で事前のスーパービジョン及び事後スーパービジョンを個々で実施した。さらに学外実習でのレポートにも全て目を通し，捺印するとともにコメントを付して個々の院生に返却した。このような形で院生一人一人に丁寧な指導を心がけた。

4. 学生からの評価と授業改善への努力

授業評価においても学部「公認心理師の職責」「社会福祉演習 I ・II（3 年ゼミ）」を担当する中で受講生からは「公認心理師の内容や，様々な内容をしっかりと学ぶことができてとても良い勉強にもなった。」「これからの勉学をさらに頑張ろうと思うことが出来た。」「説明が分かりやすかった。楽しく落ち着いて授業に参加できた。」「毎回配布・回収されるプリントに先生のコメントが書き込まれており，嬉しいのでより意欲がわく。」などのコメントを得た。毎回の授業時にリフレクションペーパーを配布し，授業時間内で学生に記入を求め回収し，翌回の授業で教員のコメントを付して返却するという授業スタイルが学生との対話の機会となり有用であるという実感を得ている。ただ，筆者の記入した字が読みにくいという指摘も見られた。次年度 ICT の更なる活用も含め改善を心がけたい。引き続き，学生一人一人との対話を重視しながら授業を展開していきたい。大学院においては受講生が少ないために授業評価の対象となっていないが，どの担当科目においても授業後の受講生からのコメントを見る限り大いに参考になったという記述がほとんどであった。引き続き心理臨床家としての基本姿勢の習得とともに，心理臨床の専門性について学生に問いながら実践家としての臨床力の涵養に尽力したい。

5. 今後の教育目標

2025 年度自身は本学着任 3 年目となり，心理学専攻も開設 2 年目を迎える。次年度も

多くの入学生を迎える予定であり，自身も心理学基礎演習（1 年生ゼミ）を担当する。本学を志望し入学してくださった学生の皆さんの学生生活が充実したものとなるよう，個々の学生に対するきめ細やかな丁寧なサポートをしていきたい。その中で心理学に関する知識の教授はもちろんであるが，学生の皆さんが卒業後，昨今の激動の世の中を生き抜いていけるような，生きる力の涵養についても取り組んでいきたい。『同朋和敬』の本学の建学の理念しかりであるが，優れた教養と人間性を兼ね備え，真に有能で社会に貢献することのできる人材の育成に取り組んでいきたい。

個々の授業科目においても引き続き学生との対話を重視し，きめ細かな授業を展開していきたい。

大学院においても，大学院生との対話を重視しつつ，きめ細かな授業の展開及び実習指導を行っていく。特に，臨床家の育成においては丁寧な実習指導，スーパービジョンが必須であり，今後もケースの指導を通して真に社会の役に立つ心理臨床家の育成に努めたい。

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部 藤林 清仁

１、教育の理念

子ども学専攻においては、健やかな子どもの育ちを支援する広い視野と高い専門性をそなえた「子どもの専門家」の養成をめざしている。その中で、私の担当する部分は障がいのある子どものこと、および子ども家庭福祉に関わる制度のことである。障がいのある子どもについては、学生たちの理解はさまざまである。その中で、一人ひとりが人権の感覚を持ちつつ、保育をどのように展開していくか考えられるような教育を行っている。そして、家族の社会背景も理解でいるよう伝えている。

また、子ども家庭福祉に関する制度については、学生たちにとって、身近でないものをいかにわかりやすく説明するかが大切である。また、実践は制度の影響を受けることについて、具体的な事例をあげて説明をしている。

２、担当授業の概要

社会的養護Ⅰ
社会的養護
保育相談支援A
保育相談支援B
幼児特別支援論A
幼児特別支援論B
子育て支援論
子ども学総論C
子ども学総論D
子ども学演習ⅠC
子ども学演習ⅠD
子ども学演習ⅡC
子ども学演習ⅡD
総合演習ⅠI
総合演習ⅡI
総合演習ⅢI
総合演習ⅣI
保育実習指導Ⅰ―２
保育実習Ⅰ―２
保育実習指導Ⅲ

保育実習Ⅲ

３、教育の方法

学生に学ぶことのイメージをいかに持たせるかということに力を入れている。制度や政策などは、実際の保育士や幼稚園教諭の姿とつながりにくいので、具体的な事例をあげながら、講義を進めている。また、DVD 教材を使い、具体的なイメージにつながるよう努めている。

講義の進め方に関しては、いま何を学んでいるのかを確認しながら進めている。テキストや資料をもとに、文字でも確かめ、事例の話で具体化し、DVD 教材でも視覚的に学ぶということで、知識の定着を図っている。

演習の授業では、他人の意見を聞いて考えることを大切にしている。また、事実と考察を分けて考えることを大切にしている。乳幼児と関わる仕事は、言葉でのコミュニケーション以外で理解をしなければいけない部分もあるため、行動などから何を考えたのか、その根拠は何かということを科学的な視点で捉えることができるようになる方法を学ぶことを大切にしている。

また、資格を取らない学生や学ぶことに意欲を失っている学生に対して、興味を持とうと思えるものを一緒に探すことも行った。

理論をどのように応用するかについて、対処方法を数多く教えても、子ども一人ひとりの違いを考えられるようではないと、応用することができない。共通することは何か、普遍的なことは何かを、理論と事例を比べて行き来するなかで、学べるように進めている。

４、学生からの評価と授業改善への努力

昨年度に引き続き、パワーポイントに直接書き込みながら説明をするなど、情報機器を使い講義を行った。また、復習用の資料を teams に入れておくなどの取り組みも行った。授業の最後にレポートを書く時間を取り入れている。その時間帯に、個別に学生へ話しかけるなど、振り返りの手助けをめざし、ただ書けばよいということをなくせるように工夫をした。課題内容について、時間をかけて取り組むなどの工夫も継続して行った。。

５、今後の教育目標

保育士や幼稚園教諭、もしくは社会福祉士になりたいと考えている学生が講義を受講している。その中で、担当科目を実践にどうつなげていくかについて、今後も教えていきたいと考えている。障害のある子どもへの実践については、対応方法をいくつ教えても、目の前の子どもに使えなければ意味がないため、共通する視点とは何かを伝えていきたい。それは、発達の視点と障害の理解を組み合わせることなので、それぞれの関係を、ほかの先生が担当されている講義とも結びつけながら教えていきたい。そして、つねに学び続ける姿勢をつけられる講義にしていきたい。

制度や政策を扱う講義については、その制度や政策がどう実践につながるかを意識して教えていきたい。学生は、法律と聞くと、実践とは別物と考えてしまうため、制度や政策がどう実践に影響を与えるかを教え、つながっていることを学べるようにしていきたい。そして、子どもに対する実践をよくするためには、制度や政策を変えなければいけないということを伝えていきたいと考えている。

１年生から４年生までのゼミ活動については、まず学生の興味や関心を広げていけるような教材提供をしていきたいと考えている。そのためには、子どものことに関連しながらも、少し違うと学生が思う分野の書籍を読み、興味を深めることにつなげていくことが目標にしていきたい。幅広い教養の中から、その知識をどのように専門へ結び付けていけるかを考えたい。たとえば、保育者として行事を考えたとき、その行事の意味は、文化や歴史に基づいたものの場合がある。その文化や歴史で大切にしなければいけないことを子どもたちに伝えなければいけないことを考えるために、しっかりと背景を知るための学びが必要であると考える。また、卒業論文の執筆に関しても、親子のことを考えたときに、経済状況や社会状況、生活文化などもしらなければ理解はできない。それらが理解できるような教材提供を考えていきたい。

実習指導については、現場へ行く前の基本的知識について、今の自分に何が必要か考えられるような指導をしていきたい。実習へ出ると、その場で考えて行動しなければいけないので、知識をどのように応用するのか、何を考えて行動するのかについて、学生と一緒に考えて、それぞれの学生が自分の課題を見つけていけるようにしたい。また、今年度の課題として、子どもの人権を守りながら、自分自身も守るということが課題になった。この点も、しっかり教えていきたい。

今年度は、社会福祉専攻のみならず、文学部からも受講している学生がいた。目的はそれぞれであるが、まったく知らない分野に対して、自分たちの生活とどう結びつけて考えるかを継続して学べるよう工夫をしていきたい。

2024 年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　准教授　宮地菜穂子

１、教育の理念

本学の「同朋和敬＝共なるいのちを生きる」という建学の理念に基づく「心と心が通じ合う少人数教育」は、アドバイザー制度によって、きめ細やかに学生一人ひとりの声に耳を傾けることを可能にすることで具現化されていると認識している。特に社会福祉学部社会福祉学科社会福祉専攻では「社会福祉専門職」の養成を目指し、社会貢献をも目指しており、宮地が担当する科目の多くも社会福祉専門職養成に関わる科目によって占められている。個人研究では社会的養護現場の子ども達の発達支援を通した子ども家庭福祉の増進を目指しており、「子どもの最善の利益のために」と「社会全体で子どもを育む」を理念とする社会的養護はまさに「共なるいのちを生きる」ことを追求する営みであると理解している。日頃から、「共に学ぶ」「共に育つ」場を保障しつつ、「学ぶとは何か」つまり「自分とは何か、自分にとって大切な人生とは何か」を考える機会、そして「自らを学ぶ＝自己覚知」に通じる学びを、いかに提供していけるかが大学教育において大変重要であると認識し、授業内容を構成し教育方法を選択するよう努めている。

２、担当授業の概要　　…以下に、2024 年度担当授業実績を示す。

【社会福祉士国家試験受験資格に関する専門科目】

・児童・家庭福祉総論Ａ　…65 名
・ソーシャルワーク実習指導基礎　…16 名
・ソーシャルワーク実習指導Ⅰ　…4 名
・ソーシャルワーク実習Ⅰ　…4 名
・ソーシャルワーク実習指導Ⅱ　…5 名
・ソーシャルワーク実習Ⅱ　…5 名
・ソーシャルワーク演習Ⅰ　…16 名
・ソーシャルワーク演習Ⅱ　…13 名
・ソーシャルワーク演習Ⅴ　…16 名

【社会福祉学部社会福祉学科教育科目（専門基礎科目)】

・生活と福祉（オムニバス）…259 名

【社会福祉学部社会福祉学科教育科目（専門基幹科目)】

・児童・家庭福祉の方法　…19 名
・社会福祉演習Ⅰ　…6 名
・社会福祉演習Ⅱ　…6 名
・社会福祉演習Ⅲ　…10 名
・社会福祉演習Ⅳ　…10 名
・卒業論文指導　…3 名

【保育士資格に関する専門科目】
・社会的養護ⅡＡ　…16 名
・社会的養護ⅡＢ　…19 名

３、教育の方法

今年度も前掲の教育の理念に基づいた教育の方法として、以下 3 つの方法を採用し実践してきた。1 つ目は、主として演習形式で展開される少人数教育におけるグループディスカッション・グループワーク・ペアワーク・ロールプレイ・事例検討等のアクティブ・ラーニングである。自分以外の他者が持つ様々な意見・価値観に触れ、視野を広げていくきっかけとして授業を位置づけ、価値を見出せるよう意図的・計画的に設定を行っている。また知識のみならず支援技術を習得するための実践の機会を大学内でいかに提供していけるかを常に考え工夫している。こうした教育の機会を多く経験することによって、学生達が共に学び・育ち、他者及び自己への学びを深めていけるような声がけを心掛けている。

２つ目は、専門的な知識の獲得と多様な社会で生じる様々な現象を想像する力を養うための講義形式による教育の方法である。具体的には、テキスト等の教材に加え、テキストを要約した資料（スライド・ＰＤＦ）、書き込み式ワークシート、公式発表されている統計データ、現場実践報告、現場実践の映像、当事者の声が記録されたドキュメンタリー等で構成されている映像教材、手記、新聞記事等を、活字・映像・音声と様々な形態の資料として、科目に応じて選択し活用している。

３つ目は、自分の身近に引き寄せて熟考し、相手に説明する力を養う教育の方法である。ゼミ形式による事例検討やゼミ論・卒論の指導に限らず、大規模授業においても授業の最後に本時テーマに関して感じたこと・新たな気づき等について振り返りを行い、要点をまとめて説明する機会を設定している。DOHO ポータルのコメント欄を活用したり、自らスライドを作成し発表する機会を設けたりと、限られた時間内で意見をまとめ発信できる力を身に付けられることを目指している。さらにツールとしてパソコンを積極的に活用できるよう、操作方法の説明も丁寧に行い、実技（操作の実践）も課題として盛り込みつつ技術の向上を促している。このような教育の方法を通して、自己覚知を通して他者理解へと辿り着くことができるよう導き、社会福祉専門職としての人材育成を目指している。

４、学生からの評価と授業改善への努力

主として社会福祉学部社会福祉学科にて「社会福祉専門職」の養成に取り組んでいることから、2024 年前期授業改善アンケートを実施した「ソーシャルワーク演習Ⅰ」の結果を取り上げ、評価と改善点について述べる。1 項目のみ、全体平均よりも低い評価結果があった。具体的には「1.講義計画・シラバス -0.13」である。基本的にはシラバスに沿っているが、若干クラス毎に各教員の判断で取り扱う教材を柔軟にしているため、この項目の平均値が下がっていると考えられた。ただ、一定の満足度が確認できているため、今後も例年

通りの進め方を行いつつ、学生の意見に耳を傾けながら、より理解しやすい演習へと柔軟に対応していきたい。今後改善すべき点について、得られたコメントは「なし」であった。次年度も基本的には同様な内容、進行で進めていきたい。

もう１科目、「児童・家庭福祉の方法」について取り上げる。アンケート調査への協力者が 11 名であり、全ての項目で全体平均よりも高い評価結果であった。感想としては、以下の通り好意的なコメントが得られたため、基本的には次年度も昨年、今年と同様な形式で進めつつ、さらに学生の興味が持てる内容へと改良を加えたい。この授業の感想（自由記述）には、「good／障害児、虐待児、といった子どもの社会的養護について学べた／児童虐待について動画で見ることで実態について詳しく知ることが出来た」と計 3 名より回答を得た。今後改善すべき点について、もっと良い授業にするための提案のコメントには、「nothing／特になし」と 2 名より回答を得たほかに記載は無く、次年度も基本的には同様な内容、進行で進めて良いと判断した。今後も分かりやすい説明に努めていきたい。

５、今後の教育目標

［短期目標（単年）］社会福祉専門職の養成の観点からは、社会福祉士国家試験における本学の合格率 30%台（2019 年実績）から段階的に毎年 2～3%程度の上昇を目指してきたが、今年度の合格率は新卒 44.4%と昨年度（26.4%）に比して上昇した。次年度に向けては全体の合格率と同程度まで引き上げることを目標としたい。

さらに児童分野チーフの立場としては、児童養護施設等の社会的養護現場や児童発達支援に携わる支援者、児童相談所等において子ども家庭福祉を専門とするソーシャルワーカーなどの新卒採用者を、毎年 5 人以上育成することを目標数値として設定したい。

［長期目標（10 年）］国家試験合格率を 50%台へ引き上ることを数値目標とする。さらに受験資格取得のための実習の充実は勿論のこと、加えて地域連携等の枠組みによって、子ども家庭福祉関係施設や里親会、ＮＰＯ法人等の外部機関との連携体制強化を図り、アルバイトやボランティア活動、インターンシップ等を通した自主的・実践的な学びの機会をより多く提供できる関係性構築を目指していく。大学と現場が連携しつつ未来の支援者育成を計画的に行い、卒業後のフォローも並行しつつ現場支援者向けの支援技術・専門性向上のための研修機会の提供及び現場との共同研究等を通して繋がり続け、「子ども家庭福祉を学ぶなら同朋大学」だと選択される大学へと発展させ、より存在感を高めていきたい。

2024 年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　教授　村上逸人

１、教育の理念

本学社会福祉専攻介護福祉コースでは、「同朋和敬」の精神を社会福祉専門職である介護福祉士養成の基本理念としている。その基本理念を踏まえて、介護福祉士養成教育のカリキュラムには、専門的知識や技術だけでなく、人間の尊厳を守り、対象者が自己決定し、自分らしく生きることを大切にすること養成教育に盛り込んでいる。さらに社会福祉士、介護福祉士の両方の知見を活かし学びながら、社会福祉法人貴和会をはじめとした介護実践現場とともに介護福祉分野において、卒業後は富士山に例えれば冠雪の部分にあたるリーダーの育成をめざしている。そうした卒業生の活躍によって、介護福祉分野の DX に関する研究・教育の拠点となることを教育の根幹としている。

介護福祉コースが、本学の社会福祉学科社会福祉専攻にあることを生かし、他のースの学生とともに、学びあい助け合いなど協力し合える関係づくりをすることを、学生時代から学修できることが、4 年生大学で学ぶ隠れた教育実践をしている。卒業後学生が、介護福祉士としてただ単に身体的介護を行うだけでなく、対象者に向けた介護をすることの意味を深く理解し、人が生きるとはどういうことかを専門分野の教員と関連施設である貴和会の職員からも学んでいく教育の観点からも重要と考えている。そのため本学の介護福祉教育と貴和会が設置経営する特別養護老人ホームの実践を結びつけ強化することで、全人的介護を実体験し、肌に感じながら介護現場に学ぶことが重要であると考えている。そうした方針のもと、対象者に適したその人らしい介護とは何かについて、教室だけでなく実習先で出会う人々から学び、多様化している福祉現場のリーダーとなるべく介護をはじめとした福祉専門職の養成を行うことをめざしている。併せて、介護福祉コースは相談援助を主体とした社会福祉士や将来高等学校の福祉科教員免許取得可能であるため、ダブルライセンスの取得可能なコースであり他者とともに生きていくために必要な知識と技術を学ぶことができる。授業を通して社会における倫理観と、人間の尊厳を理解した質の高い介護福祉人材の育成を理念としている。

２、担当授業

目標指向的介護過程	介護福祉総合演習	生活支援技術Ⅱ－２	介護福祉総合演習Ⅳ
障害者の介護過程展開	社会福祉演習Ⅲ	社会福祉基礎演習Ⅱ	障害の理解２
人間の尊厳と自立	福祉科教育法Ⅰ	社会福祉基礎演習Ⅰ	社会福祉演習Ⅳ
精神障害者の介護過程展開	障害の理解１	生活支援技術Ⅰ－１	福祉科教育法Ⅱ
介護福祉総合演習Ⅲ	障害の理解Ⅰ	生活支援技術１－２	社会福祉演習Ⅱ
介護福祉総合演習３	社会福祉演習Ⅰ	介護福祉総合演習Ⅰ	生活とケア
介護福祉総合演習ケーススタディ	生活支援技術Ⅱ－１	介護福祉総合演習Ⅱ	介護等体験

介護福祉実習Ⅰ－１　　介護福祉実習Ⅱ
介護福祉実習Ⅰ－２
介護福祉実習Ⅰ―３　　介護福祉実習Ⅱ
介護福祉基礎技術演習

３、教育の方法

介護福祉士養成は少子化と高齢化を乗り越えるため、多様な人材の参入と ICT の活用が求められている。平成 29（2017）年『介護人材に求められる機能の明確化とキャリアパスの実現に向けて』（社会保障審議会福祉部会人材確保委員会報告書）の中にある、教育内容の見直しに関わる部分について「介護福祉の専門職として、介護職の中で中核的な役割を果たし、認知症高齢者や高齢単身世帯等の増加等に伴い、介護ニーズの複雑化・多様化・高度化に対応できる介護福祉士を養成する必要がある」とされている。「求められる介護福祉士像」が示されたことによって介護福祉士の資格や必要な教育内容が明確化された。その教育内容は 1.尊厳と自立を支えるケアを実践する。2.専門職として自律的に介護過程の展開ができる。3.身体的な支援だけでなく、心理的・社会的支援も展開できる。4.介護ニーズの複雑化・多様化・高度化に対応し、本人や家族等のエンパワメントを重視した支援ができる。５・６略 7.関連領域の基本的なことを理解し、多職種協働によるチームケアを実践する。8.本人や家族、チームに対するコミュニケーションや、的確な記録・記述ができる。９略　10.介護職の中で中核的な役割を担うという、カリキュラムに加えて、高い倫理性の保持と①チームマネジメント②実践力の向上、③介護過程の実践力の向上、④認知症ケアの実践力の向上、⑤介護と医療の連携を踏まえた実践力の向上が加わり、介護福祉士養成の柱となっている。

以上のことから観察力や実践力の向上のため、手書きの計画資料を修正していくことの積み重ねと実践現場である貴和会やその他施設の指導者の招へいや目で見て肌感じ介護をチーム力と ICT を活用した介護実践ができる教育を行っている。

入学後社会人としての態度や振る舞いなどができるよう学生の適性を考慮して注意や指導を行っている。授業ごとに授業内容と学生の様子について反省と検討を加えながら、介護や社会福祉の職場における有益な人材を育てることを念頭に、学生にとって親和性の高い IT 機器も活用しながらきめ細やかな教育指導をしている。特に介護福祉士をめざす学生に対しては、福祉に必要なコミュニケーション能力と基本的な介護技術を重視している。施設で自然にふるまえるようあいさつができる教育指導を行っている。授業の中では、観察事項を言葉にして発し、記録することも毎回の授業で指導を繰り返している。

４、学生からの評価と授業改善への努力

学生による授業評価アンケートでは、授業の目的・内容、学生の授業への参加状況、教員の授業方法や態度、環境、学習の達成度・授業への満足度のいずれについても、全体の平均またはそれを上回る回答値であった。大教室で行う授業については、平均を下回るものもみられた。

今後改善すべき点については、最初の出席確認と途中の質問、最後のレポートの提出で出席の確認をしていた。一部授業に際して、学生指導や講義内容についての評価が低調のものは一層の教材研究や内容の精査を行っていく。毎回のレポートは大変との声もあるが、先の記録する力に代表される発信力向上のため内容吟味して継続していくことを今後の課題として研究していく。

現在行っている、スマートフォンの活用である。対面も WEB でも発問に解答でき、振り返りも可能となるようにスマートフォンを活用し、解答や発言を求めたり、事前に WEB に資料をアップして予習ができるようにするなど授業内容を見直し継続していきたい。

2024 年度は、一部授業を精神的に休んだ学生があり、授業を録画し対応した。またレポートに関しては必要に応じて後日に配信したり、レポート提出期間に余裕を持たせたりした。パワーポイントなどの資料は、スマホでも見やすいように行数や列数の幅を改善したことで学生から良くなっているとの評価もあり継続していきたい。

５、今後の教育目標

介護福祉士コースの学生は、入学動機に資格取得が挙げられており、就職への道であると考えられる。そのため学生の希望である資格取得を重視するとともに、介護福祉現場や教育分野、医療現場などで役立つ人材の育成と合格率の向上を教育目標としている。そのためキャリア支援センターの対策講座の１００パーセント出席や模擬試験の結果を見ての個人面談を実施して個々の学生の学習意欲継続をねらっている。特に資格に無関心でアルバイト等に縛られている学生もみられるため、そうした学生に対しては、対面や Web を活用して面談や相談を行っている。学生の状況に合わせて一年次から保護者も交えて面談を行っている。

ＧＰＡの低い学生や休みがちな学生、単位を予定より 3 つ以上落とした学生、成績評価にＤがある学生に対しては、面接を行いながら成績評価を用いて保護者も交えて行っている。面談によって希望に合った進路の情報を適時適切に受け取り、指導と連絡をしている。保護者の方の多くは卒業時の就職先に大きな監視を寄せているため、今後も学生の希望に沿った資格取得と就職支援を丁寧に進め 100%の資格取得と就職・進学をめざしていくことも目標にしていく。

。

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　講師　山口章夫

1　教育の理念

2024年度を終え、学生からの評価を含めた振り返りを基に2025年度に向けた教育目標や授業改善の方法等へ繋がる教育業績評価を記述する。担当は、教職関係の科目（特別支援教育を中心に担当）とスポーツ関係の科目（スポーツ実技・パラスポーツ指導者養成カリキュラムを中心に担当）である。

本学教職課程では、「自らのいのち（存在）と向き合うことで一人ひとりのいのち（存在）と出会い、そこから真実の道を求め、開いていく教師」の養成を目指す。これが本学教員養成の理念である。そのために、①人類文化及び社会福祉に貢献する確かな教員力の育成②社会性をもち、広く豊かな教養に支えられた実践的指導力の育成③一人ひとりのいのち（存在）と出会い、そこから真実の道を求め開いていく自己教育力の獲得に重点を置きながら、全学的な協力・指導体制をもってこの理念に取り組み、「共なるいのちを生きる次世代の教育者」を養成することにある。

「特別支援教育」では、障がいのある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人ひとりの教育的ニーズを把握しその持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援ができる実践力のある指導者を育成したい。

パラスポーツ指導員を養成する課程では、以下のような教育理念を目標として、教育にあたりたい。東京オリンピック・パラリンピック後、障がいのある方の運動やスポーツに目を向けられることも多くなってきた。しかし、一般市民レベルでの障がいのある方の運動・スポーツの波及や環境整備は十分ではない。本来、”Sport”はその言葉がもつ語源の下、誰もがスポーツを“楽しむ”ことが出来るようにルールや様式が変更され作り出されてきた背景がある。高齢化社会を迎えた今、多くの方に見合った形で参加でき、楽しみながら生涯に渡ってスポーツに親しめる環境作りの重要性も増してきている。こうした「誰もが楽しく参加可能」なスポーツの環境作りは、各々がもっている個性や優れた能力を尊重し、多様な価値観を生み出すことが可能である。そして、人々がスポーツを通じて共生しながら新しい社会を創り上げていきたい。それと共に、社会に生じる無意味な壁や垣根を取り払い、誰もがその人らしいライフスタイルを実現させ、日本をさらにより良い社会へと導いていける指導者の育成を図りたい。

2　担当授業の概要

・社会福祉基礎演習Ⅰ・Ⅱ　17名

・社会福祉演習Ⅲ・Ⅳ　10名

【教職関連】

・障がい児教育方法論　7 名
・肢体不自由児教育総論　3 名
・重複障がい児教育総論　5 名
・LD 等教育総論　5 名
・教育演習事前指導（中・高）　24 名
・教育演習事前事後指導（中・高）　13 名
・教育演習事前指導（特別支援学校）　5 名
・教育演習事前事後指導（特別支援学校）　6 名
・教育実習（特別支援学校）　6 名

【スポーツ関連】

・障がい者スポーツ指導法　83 名
・スポーツ健康科学　192 名
・スポーツ実技Ⅰ　18 名
・スポーツ実技Ⅳ　8 名

3　教育の方法

本学の特別支援学校教諭免許状の対象領域は、「知的・肢体・病弱」である。したがって、通常の教科の知識だけではなく、学校教育法施行規則第 130 条で定められている「教科・領域を合わせた指導」についての知識や実践力も必要となる。そして、特別支援学校の教諭として必要となる専門性については、以下の 9 点であると考えている。その 9 点についての知識・技能・態度について上記の担当科目に必要な内容を盛り込み実践的な専門性をもった教育者を育成する。

(1)「特別支援教育に関する理念や法律などについての知識・理解」（特別支援教育に関する基本的な考え方や関連する法律などに関する知識や理解についての内容）

(2)「障がい全般に関する知識・理解」（様々な障がいについて、その定義や特性などについての内容）

(3)「障がい全般あるいは特性に応じた指導・支援などに関する知識・理解」（様々な障がいに関して全般的なあるいは特性に応じて必要な指導や支援に関する知識や理解についての内容）

(4)「個に応じた指導・支援をするために、その子どもの実態を把握すること」（その子どもにとって効果的な指導や支援を行うために、その実態把握をするための方法や見方・分析についての内容）

(5)「個に応じた指導・支援をするために目標や内容・方法を選択し計画・準備をすること」（その子どもの実態に応じて、効果的な指導や支援をするために目標や

内容・方法を選択し、計画・準備をすることについての内容）

(6)「個に応じた指導・支援をするための実践力・対応力・教材活用力」（その子どもに応じて、効果的な指導や支援をするために計画した指導内容や支援内容を、実際に子どもに対して実践したり、さまざまな機会に対応したり、教材を活用したりすることについての内容）

(7)「子どもとのコミュニケーション・信頼関係づくり」（子どもに効果的な指導・支援を行うために必要な、子どもとのコミュニケーションを築いたり信頼関係を作ったりすることについての内容）

(8)「教員としての人間性や子どもに向き合う姿勢」（子どもと接する際の教員としての人間性や姿勢についての内容）

(9)「支援者間の関係作りと校内外の連携・コーディネート」（保護者や教員、校内・外の専門機関を含む支援者間の関係づくり及びそのコーディネートについての内容）

障がい者スポーツ指導員養成課程では、「障がい者スポーツ指導法」や「スポーツ健康科学」の講義を中心に写真や動画を活用して知識を意欲的に高める方法を追求していきたい。また、障がい者スポーツ指導員の技能面では、愛知県知的障がい者サッカー連盟や愛知県における障がい者スポーツ団体と連携し、実際のスポーツ大会でのボランティア活動に参加し、障害のある方々との交流や実際のスポーツ大会運営のサポートを通して体験的に身に付くことができるようにしたい。

4　学生からの評価と授業改善への努力

学生からの授業アンケートによる授業改善については２科目が対象となり、１科目目は「障がい者スポーツ指導法」の科目についてである。評価結果については、アンケートの回収率が履修者８３名のうち２８名で約３４％であり、授業でアンケートの時間を取ったにもかかわらず、低い回答率であった。各項目の平均点は　「４．０」以上であり、今後も同様な状況で授業を進めていきたいと考える。アンケートの回答では、各項目の質問に対して、「そう思わない」「全くそう思わない」の該当者は「０」で改善すべき視点が今回はなく、良い状態で授業が実施できたと思う。しかし、教材については、質を上げていくべきである。今後の改善点として考察した。来年度は、アンケートの回答について、複数回の授業で実施していきたいと思う。今後改善すべき点については、「教材」について授業でも説明しているが指定の教材で予習し、復習で振り返る教材として活用するように指摘している。新旧カリキュラムを網羅した授業の中で指定教材が該当しない部分もあり、指定教材通りに授業も構成できない状況もあるが、授業においても指定教材に記載されている点は、授業でもスライド説明だけではなく、教材自体でも確認していくことが必要であると考えた。今後、学習内容を指定教材で確認し、活用頻度を上げていきたい。

２科目目は、「スポーツ健康科学」の授業についてである。アンケートの回収率は、７４名のアンケートの回答で履修者が１９２名であり、約３９％であった。授業でもアンケート回答の時間をとり、回答を促してきたが、回答率が低く残念である。平均点が「４．０」以上の項目については、今後も同様な状況で授業を進めていきたいと考えているが、今回は「４．０」を下回る項目について改善していきたい。該当する項目は、コミュニケーションで「３．９」とやや低い評価であった。今後改善すべき点については、「コミュニケーション」の項目についてであるが、履修学生が 192 名と非常に多く、コミュニケーションは一方向になりやすい。今年度は、例年より一段と履修生が多く、授業開始時から徐々に増加し、教室へ入れなくなり 12 階ホールへ変更することとなった。学生とのコミュニケーションについては、授業内で発言を求める場面を設定することが難しく、質問を受けることが主流となっている。12 階ホールでは、学生も発言することが難しい状況があり、teams のチャネルやチャット機能を使用してコミュニケーションをとることが非常に多い。また、毎時間授業のリアクションペーパーの提出状況を確認するような名簿を作成し、学生一人一人へ声をかけ、コミュニケーションが少しでもとれるような配慮はしている。学生の発言を引き出すようなコミュニケーションを活性化するためには、同じ内容の授業を二つに分割し、授業を規模を縮小することが求められる。

5　今後の教育目標

学習指導要領の改訂と情報活用能力の育成として、文部科学省から ICT 機器の活用の推進が提言されている。平成 29 年 3 月に小学校及び中学校の新学習指導要領が、30 年 3 月に高等学校の新学習指導要領が公示されたなかに、「情報活用能力」が、言語能力などと同様に「学習の基盤となる資質・能力」と位置付けられ、各学校におけるカリキュラム・マネジメントを通じて、教育課程全体で育成するものとなった。また、新学習指導要領総則では、各学校において、コンピュータや情報通信ネットワークなどの ICT 環境を整備し、これらを適切に活用した学習活動の充実に配慮することを新たに明記されている。さらに、新小学校学習指導要領では、コンピュータでの文字入力など情報手段の基本的な操作を習得する学習活動を充実することについて明記された。加えて、小学校段階でのプログラミング教育を必修化するなど、小・中・高等学校を通じてプログラミングに関する内容も充実してきている。

更に、学校現場では、2018 年からの 5 か年計画で ICT 機器の整備が行われてきている。実際に、今年度教育実習を実施した学生 3 名（特別支援学校）は、ICT 機器を活用した教材作成を実施した。学校により様々な ICT 機器やソフトを活用している現状がある。そこで、ICT 機器を効果的に活用した学習に取り組んでいきたい。iPad の使用方法として①学習自体のツール②スケジュールを提示するツール③コミュニケーションとしてのツール（特に表出言語）④カメラ機能を活用しての児童生徒の振り返りのツールと

しての使用といった 4 点の観点で学習を進めていきたい。

また、特別支援学校の教師を目指す学生は、基礎免許状が中・高であるため、特別支援学校の生徒の卒業後の進路についての学習も深めていく必要があると考えている。講義の中で、特別支援学校の生徒の進路先について内容を取り上げ、理解を深め、実際の就労支援事業所での体験談も交えて教育演習の授業で計画し、実践していきたい。

障がい者スポーツ指導員養成課程では、その資質を高めることを目標に方法や改善点を述べてきたとおりであるが、スポーツ指導者としての資質の中で「安全管理」の能力は重要な実務の基盤となる。いわゆる指導者の危険予知義務の知識や対処方法について、情報を整理して身に付けておく必要がある。特に、障がい者スポーツ指導者を目指す学生が、各種目のスポーツ競技中だけでなく、それ以外の「移動」「トイレ」「施設の使用方法」「緊急時の対応」等の状況についての危険についても予測できるような力を身に付けたうえで、障がい者のスポーツ指導に取り組めるように指導者養成課程の指導に取り組んでいきたい。

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　教授　吉田みゆき

（１）教育の理念

本学の精神保健福祉士養成課程は、心の病や障害をもつ人々に対する社会復帰・社会参加支援の取り組みの実現のために「高度な専門知識を身につけて、社会の要請に対応できる医療、福祉、司法、教育などの分野で活躍できる精神保健福祉士の養成をめざす」としている。そのために、まずは当事者の声に耳を傾けること、一つの視点ではなく様々な角度から現状を把握すること、そしてそれらを科学的に分析することを教育の柱としている。そのうえで本学での学びを通してそれらを達成するために必要な実践力を身につけ、様々な分野で活躍することのできるソーシャルワーカー（精神保健福祉士）を送り出すことを目標に教育を行なっている。

（２）担当授業の概要　　2024年度担当授業実績を示す。

（学部）

社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ　　社会福祉演習Ⅲ・Ⅳ

精神保健福祉制度論（新カリ）・精神障害者の生活支援システム（旧カリ）

ソーシャルワークの理論と方法Ⅴ、ソーシャルワークの理論と方法Ⅵ

精神保健福祉援助演習ⅠA、精神保健福祉援助演習 Ⅲ

精神保健福祉援助実習指導（基礎）、精神保健福祉援助実習指導Ⅰ、

精神保健福祉援助実習指導Ⅱ

卒業論文指導・卒業論文

（大学院）

精神保健福祉研究

（３）教育の方法

全般的に学生一人ひとりに合わせた教育を行うように心がけている。それは学力面だけではなく、例えば学生本人が抱えている病気や障害、家庭の状況など、日頃から学生と会話をすることでそれらの情報をキャッチし、必要なサポートをしながら進めている。

講義科目：私が担当する講義科目は、精神保健福祉士養成課程の専門科目である。従って厚生労働省が示す「学ぶべき事項」に沿って授業を体系的に展開している。しかしこれらの科目は本学社会福祉専攻の専門基幹科目でもあるので、課程履修者以外の履修生も多い。そこで途中からその科目だけ学んでも、前後の繋がりがわかるようにと心がけ、講義の最初には大まかな振り返り等行なった上で授業を行なっている。

演習科目：演習では学生の授業への動機をどのように高めるかが重要だと考えている。何

のためにこのテーマで演習を行うのか、それが実習や将来の仕事にどのように結びつくのかなどを具体的に説明し、楽しく学べる工夫も取り入れ学習を進めている。

実習指導・実習：本学の精神保健福祉課程では、２年次に２日間の見学実習、３年次・４年次にそれぞれ 12 日間または 18 日間の現場実習を行なっている。この段階的に積み上げていく実習は自分の実習を振り返り達成したこと、課題として残ったことをまとめ次の実習へとつなげることができる。教員として一人ひとりの進度に合わせ一緒にそれら作業を行なっている。また、年度末には現場の実習指導者にもお集まりいただき、２～４年生が揃った実習報告会を開催している。そこでは学生たちの発表に対して指導者より率直な意見をいただき、そのことが学生にとってとてもよい刺激になっている。

ゼミ（社会福祉演習）：３年次後期には「精神障害者サポートプロジェクト」として，精神障害者やその家族にとって自分たちは何ができるのか、インタビューや企画を考えながら実践的に学んでいる。4 年次は毎月 1 回「誰でも参加できる SST」を開催し、学生は企画運営すること、参加者（当事者）と直接触れ合うことを通して自分の働く姿を想像している。また時間をかけながらも卒業論文の執筆に取り組むよう指導している。

（４）学生からの評価と授業改善への努力

「学生による授業評価アンケート」の授業満足度は、例年５段階評価で概ね４を超えている。特に演習・実習科目では 4.5 を超える科目もある。良いと評価されたことについては継続し、さらなる工夫、配慮が必要な内容は改善するよう心がけている。

（５）今後の教育目標

本学における精神保健福祉課程では国の施策動向に目を向け、一方で地域にはどのようなニーズがあるのかを掴む学びを目指す。また精神障害をもつ人やその家族は何に苦労しているのか、学生の目で見て耳で聴くことも行なっていきたい。具体的には地域で活躍する精神保健福祉士や当事者に学外講師として来ていただき、現場の生の声を聞くことを重視したい。合わせて学内で実施する「誰でも参加できる SST」を継続し、それらで得たことと講義で学んだことを照らし合わせ、現状を把握できる力をつけることを目指す。

本学における教育で限界と感じていることが一つある。それは「多職種連携」について学ぶことである。精神保健福祉分野での多職種とは、同じ福祉分野の他業種や行政職員のみならず、医師・看護師・薬剤師・作業療法士などの医療職が挙げられる。連携する場合まずそれらの職種の専門性を理解することが求められるが、学内では医療職と出会う機会がない。学生たちは精神科医療機関での実習を必ず行うこととなっている。学内で取り組めないことを現場で実践しながら学べるように、学生と現場の実習指導者と教員が、それこそ連携して取り組んでいく必要がある。

最後に、精神保健福祉課程の２名の専任教員が力を合わせ、お互いの現場経験、教育経験を生かして、学生にとってより良い教育を今後も実践していきたい。

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　羅　佳

１、教育の理念

担当科目は国家資格・社会福祉士養成に係る講義と演習、実習指導の授業であるため、ソーシャルワークは何を大事にしているのか、どのような課題を取り上げてどう対応していくべきか、人々の生活の中で生じている課題をソーシャルワークの視点からどのようにとらえるべきか、社会福祉援助技術を含めた社会福祉学という学問領域での探求を常に意識し、学生の主体性を大事にしながら教育実践を行なっている。また、人々の生活課題は総合的に表れていることに対し、総合的かつ包括的に支援を行うソーシャルワーク専門職の育成が求められている。本学社会福祉学部社会福祉学科（社会福祉専攻）のカリキュラム・ポリシーにも示されているように、「自ら課題を見つけようとする姿勢や考え方、またそれら課題解決の方法や判断について体系的・総合的に学修が進められるように」、「地域社会に貢献できる人間を養成する」ことを目指し、授業に取り組んでいる。

２、担当授業の概要

＜講義系授業＞

- ソーシャルワーク論Ⅰ　239名
- ソーシャルワーク論Ⅱ　142名
- ソーシャルワークの理論と方法Ⅱ　68名
- （旧カリ）ソーシャルワークの方法Ⅱ　1名
- 生活と福祉（オムニバス授業）　258名

＜演習系授業＞

- 社会福祉基礎演習Ⅰ（前期）　16名
- 社会福祉基礎演習Ⅱ（後期）　16名
- ソーシャルワーク演習Ⅲ（前期）　12名
- ソーシャルワーク演習Ⅳ（後期）　9名
- 社会福祉演習Ⅰ（前期）　7名
- 社会福祉演習Ⅱ（後期）　7名
- 社会福祉演習Ⅲ（前期）　2名
- 社会福祉演習Ⅳ（後期）　2名

＜実習系授業＞

- ソーシャルワーク実習指導（基礎）（前期）　13名
- ソーシャルワーク実習指導Ⅰ（前期）　5名
- ソーシャルワーク実習（随時）　5名

３、教育の方法

＜講義系授業＞

講義系授業として、「ソーシャルワーク論Ⅰ」「ソーシャルワーク論Ⅱ」「ソーシャルワークの方法Ⅱ（旧カリ）／ソーシャルワークの理論と方法Ⅱ（新カリ）」を担当している。うち、「ソーシャルワーク論Ⅰ」と「ソーシャルワーク論Ⅱ」はソーシャルワークの定義、歴史、理念、価値、倫理、範囲、対象等、ソーシャルワークの基礎を学ぶ科目である。「ソーシャルワーク論Ⅰ」は社会福祉士国家試験資格取得の必修科目であり、卒業必須の科目でもある。この科目の履修生の多くが 1 年生であり、履修者数が最も多い科目となっている。1 年生が多いという特徴を踏まえ、社会福祉専門職養成体系の全体像を紹介したうえ、大学で何をどう学ぶか、カリキュラムと国家試験体系の中における「ソーシャルワーク論Ⅰ」の位置づけ等について、授業時に説明を行なった。「ソーシャルワーク」に初めて出会う学生が多いことを想定し、文字だけでは理解しがたい内容が少なくないため、適宜に時事や実際の支援例、および映像資料を活用して授業を組み立てていた。

「ソーシャルワークの方法Ⅱ（旧カリ）／ソーシャルワークの理論と方法Ⅱ（新カリ）」の授業では、本科目の位置づけ、および社会福祉専門職養成の中での位置づけを説明し、学生にとって全体像を理解したうえでの学習を進めることができるように授業内容と構成を工夫した。また、「応用」することを学生に伝えるために、事例を取り上げて実際の支援時に理論や技術をどのように活用するかを大事にして授業を実施している。

＜演習系授業＞

「社会福祉基礎演習Ⅰ・Ⅱ」は初年次演習で、この授業では、大学での学びの特徴、学習方法、ノートの取り方、情報収集の方法等を解説し、クラス内の情報共有・意見交換を通じた相互学習や、表現力を養うプレゼンテーション力の向上を目指し授業に取り組んでいた。

「ソーシャルワーク演習Ⅲ・Ⅳ」は社会福祉士国家資格取得を目指す学生が履修する科目で、「ソーシャルワーク実習Ⅰ」の終わった学生が履修する科目である。その特徴を踏まえて、まず、多分野で実習を受けていた学生が相互に学びあい、多領域にわたるソーシャルワークの実際に対する理解を深めるように授業の進行を工夫していた。このことを通して、多様な利用者と出会う中で学んだことや、多様な社会福祉の現場があることを共有する中で社会福祉への学びを深めることをねらいとしていた。つぎ、実習で学んだことを活用していただくために、異なる対象の事例を提示して、エコマップの書き方、アセスメントにおける観察と記録、事例分析の方法と留意点等について、理解を深める授業内容にしていた。さらに、履修する学生の一人ひとりの授業参加状況を観察し、全員が発言するように、適宜にコメントして学士のフォローをしていた。

ゼミでは、学生の考える力を引き出すために、新聞記事を活用して意見交換をしていただいたりする工夫をしていた。また、ゼミ研修活動を企画・実施することで、3 年生と 4 年

生のつながり、学生の行動力の向上につながることができた。ゼミ研修活動の後に、報告書を全員で分担して作成することを通して、論文の読解力や文章力の向上を高めていく取組みを行っていた。

＜実習系授業＞

担当している実習系授業は、ソーシャルワーク実習における事前学習・実習・事後学習から構成されている。ソーシャルワーク実習では、実習・実習指導の意義および現場における社会福祉士の業務の実際を理解することが求められている。障害者福祉領域の実習指導を担当しているため、事前学習として、障害に対する理解、障害者に対する理解、専門知識の学習、ソーシャルワークの価値・理念・技法・プロセス等の再確認を行ない、実習計画書作成の個別指導を行なっていた。

ソーシャルワーク実習では、実習日誌の確認と指導をはじめとして、利用者に対する理解、実習先に対する理解、ソーシャルワークの価値・知識・実践的な技術に対する理解、現場における様々な職務のなかで社会福祉士と他職種との連携のあり方やその実際に対する理解等を深めるように実習生に対する個別指導を行なっていた。

実習事後学習に該当する授業時間では、ソーシャルワーク実習で体験した対象の理解、施設・機関の役割、専門職の役割について振り返り、異なる実習先で実習を受けていた学生が相互に学びあい、多領域にわたるソーシャルワークの実際に対する理解を深めるように授業の進行を工夫していた。また、実習の振り返りシート作成の個別指導を行なった。

４、学生からの評価と授業改善への努力

授業の目的、内容、学生の授業への参加状況、教員の授業方法等について全体として肯定的に評価されている。全体平均値より下回っている項目について、全体平均値に近づくように今後改善していきたいと考えている。

５、今後の教育目標

担当予定の講義系・演習系・実習系の様々な形式の授業では、アクティブランニングをもっと取り入れていく予定である。

ソーシャルワーク実習指導（基礎）のとりまとめ役として、実習生の共通する知識基盤を作っていきたいと考えている。

ゼミ生と一緒に地域活動に参加し、学生が 1 時間ほどのレクリエーションを企画し、参加された一人暮らし高齢者と一緒に楽しい時間を過ごした。このような課外活動を次年度にもっと取り入れて、大学での座学とフィールドにおける実践体験とを融合する教育を行なっていきたい。

さらに、長期的目標として、地域を知る人材、地域を動かす人材の養成に心がけ、ローカルに活躍できる人材養成を意識して取り組んでいきたいと考えている。

2024年度ティーチングポートフォリオ

社会福祉学部　教授　渡邊　幸良

１、教育の理念

本学の社会福祉学部社会福祉専攻では、建学の理念である「同朋和敬」の精神のもと、広い知識と専門の学術を身につけ、社会福祉・教育・心理・経済行政など、地域社会に貢献可能な人間を養成することを目的としている。その実現のために、自ら課題をみつけようとする姿勢や考え方、またそれら課題解決の方法や判断について体系的・総合的に学修が進められるようにカリキュラムを組み立てられている。そこで、豊かな教養を培って人間と社会に関する心理を探求し、社会福祉及び関連分野に関する専門的知識と技能を習得して、共に生きがいのある社会の実現に寄与するための教育・研究を行っています。

２、担当授業の概要

社会福祉基礎演習Ⅰ　14名
社会福祉基礎演習Ⅱ　16名
社会福祉演習Ⅰ　12名
社会福祉演習Ⅱ　12名
社会福祉演習Ⅲ　15名
社会福祉演習Ⅳ　15名
社会保障論Ⅰ　124名
社会保障論Ⅱ　132名
社会政策　123名
ソーシャルワーク実習指導（基礎）　17名
ソーシャルワーク演習Ⅰ　17名
ソーシャルワーク演習Ⅱ　12名
貧困に対する支援　62名
低所得に対する支援と生活保護　1名
福祉行財政と福祉計画Ⅰ　1名
キャリア支援講座Ⅰ　60名
※寄附講座として開講して管理・運営
キャリア支援講座Ⅱ　61名
※寄附講座として開講して管理・運営

３、教育の方法

渡邊の担当科目は、大別すると、初年次教育、ソーシャルワーカー養成および社会政策

に関係する科目になる。初年次教育として１年生の通年ゼミ（社会福祉基礎演習）があり、授業担当するとともに取りまとめをしながら、社会福祉専攻全体の 4 年間を通じた少人数教育によって、学生のコミュニケーションのレベルアップ、主体性の確立等を図っている。そのため、ノートの取り方やレポートの書き方などからはじまり、さまざまなアクティブラーニングの基礎的な手法を学生が体験できるようにしている。そして、グループ学習によって１年間の学習成果をプレゼンテーションできるようにしている。

次に、ソーシャルワーカー養成については、社会保障や貧困を中心とした福祉制度の知識や制度とソーシャルワークの方法について学生たちの理解が深められるように配慮し、演習・実習などの少人数教育によってソーシャルワーカーの基礎力を高めるために PBL などのアクティブラーニングの手法を活用しながら一人ひとりの学生にあったきめ細やかな指導をしている。

そして、社会政策では、社会政策の歴史と大河内理論をもとに、現代社会で起きる労働問題と政策について解説しながら、受講生に考えさせながら授業を進めている。

また、３・４年次のゼミ（社会福祉演習）では、社会保障の歴史を説明し、福祉国家やソーシャルワークの方法の知識の修得を目指すとともに、公務員試験対策も行ないながら、課題を発見し様々な分野の人との協働や連携を通じて実践的に取り組むことのできる力を高めることを目指している。

４、学生からの評価と授業改善への努力

2024 年度の授業評価アンケートは、前期、後期とも、はほぼ４以上の評価であった。

「社会保障論Ⅰ」は、（話し方）や（学習目標の明確化）などが授業の運営については高評価であるが、（コミュニケーション）や（教材）はやや低い評価であった。「貧困に対する支援」は、実際のホームレス調査や、生活困窮者などの実態を交えているので、学びが多いとの評価であった。

「社会保障論Ⅱ」は、知識を増やすことができたり、興味がわくようになり、楽しい授業であるとの評価があった。「社会政策」は、分かりやすく、興味がわいた、人生に役に立つ、この分野に興味を持ったなど、非常に高評価であった。「教授のお話が面白いです。講義内容に即したお話を時折混ぜてお話しされる為、深く関心を持って講義に臨むことができます。教授の講義が本大学の講義の中でも 1 番と言っても過言では無いぐらい面白く学びになる為、本講義を４年次に受講できることに感謝します。」という自由記述もあり、授業をしていてうれしくなる評価であった。「ソーシャルワーク演習Ⅰ・Ⅱ」は、少人数であり、分かりやすく、興味がわいた、人生に役に立つ、この分野に興味を持ったなど、非常に高評価であった。

５、今後の教育目標

全体的に高評価であり、基本的には同じ路線で授業をしていこうと考えている。ただし、

スライドが早くなることがあるとか、説明が聞きづらいという意見もあったので、この点は改善していくつもりである。また、講義の授業では、毎回リアクションペーパーをウェブ経由で提出してもらい、受講生の理解度を把握し、疑問点や誤解などを次の授業で説明し直している。

今後も、今年度の授業方法を継続していくつもりである。さらに、アクティブラーニングの方法も取り入れて、学生や教員に具体的な学びや育成の方向性を与えたい。そして、学生たちの持つ具体的な能力や要素を掲げることによって、学生や教員の目指す教育内容を、人材育成という側面から理解できるように配慮していくつもりである。そこで、学生たちの持つ能力を伸ばし「なれる自分」を育成するとともに、将来の「なりたい自分」を描けるように導いて、学生の将来を具現化していくことに努めようと思う。